

# 惲代英の五四時期の思想

——日記を中心に—— (二)

後 藤 延 子

## 第二章 惲代英とキリスト教青年会

### 第一節 はじめに

惲代英が一九一七年十月、武昌中華大学の友人たちと四人で組織した互助社の背後に、キリスト教青年会(YMCA)の影響が大きく作用していたことについては、既に述べた事である。<sup>(1)</sup> 惲代英は一七年初めから Our Club (我們的俱樂部) の結成を企て、趣意書、規約の草案を作っていたが、ついに八月十九日、第一回の会合にこぎつけ、行楽の歓を尽した。<sup>(2)</sup> その翌々日惲代英は廬山牯嶺で開かれた中華基督教聯合会主催の夏令会<sup>(3)</sup>に参加し、深い感銘と熱い激励を受けて、学校青年会にならいつつキリスト教精神を含まない、「自ら助け人を助けるを宗旨とする」 Good Student Society (中国名・学生会) の結成を友人たちと呼びかけた。<sup>(4)</sup>

しかしこれは計画が壮大すぎてまともらず、結局、親しい友人たちと「小団体を組織する」ことに踏み切った。<sup>(5)</sup> 従って互助社は Our Club の発展的解消であると同時に、Our Club が単なる友誼・行楽団体であるのに対し、YMCA の如き、「修養し且つ社会のために奉仕(服務)する団体」への成長・脱皮を期するという明確な目的意識をもっていった。<sup>(6)</sup>

ことほどきように夏令会の衝撃・影響は大きいものがあつた。惲代英は更にその年の冬<sup>(7)</sup> 令会にも出かけ、また翌一八年七月の夏令会には互助社のメンバー、及び互助社に加入していない中華大学の同窓たちと総勢十一人で繰り出している。そして一九年七月末からの、父にプレゼントした、父と弟(惲代賢)の三人の廬山旅行の際にも、夏令会で知り合ったブライズ牧師<sup>(8)</sup>と旧交を温めている。

惲代英の現在残っている日記(一七年、一八年二月〜七月、一九年)には、第二節と第三節で詳細に辿るように、YMCA との日常的に頻繁な接触の事実が数多く記述されている。そしてこうした YMCA とのつながりは、五四新文化運動期の青年学生にとって、決して珍らしい例ではない。むしろ大なり小なり何らかの形で YMCA と関わりをもっていたのが一般的であつたとさえ言える。<sup>(9)</sup> とはいえ惲代英の場合、その接触の頻度さと深さにおいて、他とは異なり目立つものがあつたと言える。

そしてその惲代英が、後に一九二三年秋に上海で中国社会主義青年団の機関紙『中国青年』の主筆に就任して以来、『中国青年』誌上に、また上海『民国日報』副刊『觉悟』紙上にキリスト教批判の文章を盛んに発表し、更には編集者として『中国青年』の紙面をキリスト教批判に大幅に提供することを行っている。勿論これは、辛亥革命前後から二〇年代にかけてプロテスタント伝道の発展期とし

てキリスト教の浸透が著しかったこと、及び二四年から二六年初頭にかけての反帝国主義、教育権回収などのナショナリズムの昂揚を背景にした反キリスト教運動の一翼を担うものであり、惲代英一人だけの突出した行動ではなかった。<sup>(9)</sup>

だが惲代英の場合、その早熟な文筆活動の当初から、無神論、科学の進歩への信頼、科学的知識の尊重の立場を一貫して堅持し、宗教をも含めた一切の宗教を否定していた。彼の場合、宗教としてのキリスト教に対する旺盛な批判意識は、YMCAとの密接な関わりの中でも存分に発揮されていた。キリスト教批判の持続時間、及びその発表した文章の量において、他に類を見ない執拗さを示している。

この惲代英におけるYMCAとの親密な接触、それに対する深い敬意・共鳴、それから受けた大きな影響と、他方でのキリスト教に対する執拗で鋭い批判との関係を、一体いかに解すべきか。彼はキリスト教のどこに惹かれ、どこに学ぶべきものを見出し、そしてどこに許容できないものを感じ取ったのか。これが本稿の私の問題である。以上の問題は、惲代英の五四時期の思想と行動の特質に迫る上で不可欠の課題であり、またこの時期のキリスト教、とりわけYMCAの果たした役割、意義を見定める上で重要な課題であると考ええる。また詳細な日記という貴重な資料を残した惲代英の例の一つのケース・スタディとして、中国人のキリスト教受容の特徴の一端に迫ることができれば、望外の幸いと言える。

さてそれでは次節では、惲代英とYMCAとの交流を中心に、その具体的なありさまを少し詳しく追ってみたい。

## 第二節 惲代英とYMCAの交流(一)

一九一五年、武昌中華大学預科を修了して本科の文科中国哲学門に進学した惲代英は、その年に既に『懷疑論』、『新無神論』を発表していた。更に一七年には、『新青年』に『物質實在論』、『論信仰』及び『東方雜誌』に『経験与知識』を発表した。いずれも宗教信仰否定、科学の漸進的發展による世界の未知の領域の解消への確信を説くものであった。彼のこうした一切の神秘的非合理的なものを排し、ただ真理のみを追求する非妥協的姿勢は、その生涯を通じて動揺することはなく、それゆえ宗教の入りこむ余地はなかった。<sup>(10)</sup>

にもかかわらず惲代英は、YMCAに好意と興味をいだき、常に出入りしていた。そこでピンポンに興じ、またその講演を聴きに行つて、武昌出身で一七年にYMCA全国協会講演部部长に就任して以来二十年間YMCAの幹部職にあつた余日章の演説と、上海YMCA講演部員であつた凌儀器の演説とには、讃嘆を惜しんでいない。また一七年になって初めて原稿が『青年進歩』に掲載され、YMCA関係の人々の注目を惹くようになつていた。

彼のこうしたYMCAとの密接な関わりは、当時の青年学生の新知識への渴望、健全・正当な娯楽や体育の要求を充たす場として、他に適当なものがなく、YMCAが極めて巧妙にそれに応えていたという事情がある。そもそもYMCAの創設の由来からして、そうした狙いの下に組織されていた。キリスト教に無関心ないしは批判的な者にも門戸を開放し、大きく網を打つものであり、YMCAに入会するものも必ずしも信者であるという条件はついていなかった。<sup>(11)</sup>従つて当時の青年学生にとり、いつでも誰でも自由に出入りでき、そこで西洋近代の新文化・新知識を無料で存分に摂取でき、また遊

戯・体育施設も気兼ねなく利用できるYMCAの存在は、まことに得難いものであったにちがいない。

とりわけ当時の青年学生に魅力的であったのは、YMCAのバイブル・クラスへの出席などを通じて、英語学習の場が得られたことである。中国の場合、YMCAで聖書研究の任に当たるのは大抵アメリカ人であり、ナマの英語に接して英語の実力を養成するに絶好のチャンスであった。そしてそれは、留学の夢の実現に直結していた。<sup>(14)</sup> 憚代英の場合、中華大学に正規の授業として外人教師が教えに来ていたこともあり、特にその点についての要求はさほど切実でなかったようである。ただ一七年二月八日の日記によると、将来の進路として英国または米国への数年間の留学、経済的都合でそれかなえられぬならば、武昌の教会学校文華大学の上院、あるいは上海のセント・ジョーンズ大学に進学して、英語能力の増強を図りたいとの夢をもっていたことがわかる。

さてYMCAとの頻繁な日常的交流が背後にあったればこそ、憚代英は一七年夏の廬山での夏令会に誘われたと見てよい。<sup>(15)</sup> そしてこれに応じた憚代英は、八月十九日の日記の中で、参加の目的を六つあげている。それは、「キリスト教の真の意義を調べ考察する」、「夏令会のやり方とその長所を調べ考察する」である。他の四つは、廬山の名勝地に遊ぶ、見聞を増す、身心と視力の休養を図る、他郷の友人と知り合う、といった一般的な事柄である。従って彼にとり、その参加の主目的は前の二つにあり、キリスト教の教理への理解を深め、キリスト教徒の活動のありさまをじかに観察して、参考にすべき長所を見極める最適の機会として位置づけられていたことがわかる。

さて八月二十一日友人と共に参加した夏令会は、二十三の学校か

ら百十人の学生、及びリーダーたち三十三人、計百四十三人の大合宿であった。ほぼ十日間、朝六時起床、夜十時就寝の規則正しい日程の下、聖書研究(査経)、講演、討論会などが、合間に遊覧ハイキング、遊戯、体操などを適宜折りこんで進められ、憚代英はいつになく健康で、極めて充実した生活を楽しむことができた。その間、ブライスなど西洋人宣教師たち、また鄭和甫、張福良、饒志安など中国人教徒たちと交わることができた。また湖南から参加した舒新城とも知り合った。<sup>(16)</sup> 彼が武昌に戻ってのち親交を結び、のちに互助社のメンバーともなる汪強(伯平)ともここで初めて出会っている。

憚代英はこの合宿期間中、そのスケジュールに忠実に従ってキリスト教のシャワーを満腹するまで浴びながら、自由時間には貰った貸与されたりしたキリスト教関係の本をせっせと読んでいた。特にブライスが貸してくれた「The Meaning of Prayer」を熱心に繙いている。<sup>(17)</sup> そして合宿の最後の八月三十日の夜、「定志会」が開かれた。憚代英は夏令会が身心ともに有益であったことを謝しつつ、非キリスト教徒が互いに励まし合ってキリスト教徒に勝るべく努力すべきだとの決意を述べた。と同時に偽キリスト教徒も非キリスト教徒に笑われぬよう頑張ってほしいとの注文もつけた。

彼の発言が大きな波紋を呼ぶ中で、非キリスト教徒舒新城から宗教問題について共に研究したいとの申し出があり、またキリスト教徒饒志安から真のキリスト教徒となる方法について共に研究したいとの提案があった。「祈禱と上帝を信ずることとが、キリスト教の精髓である」と考える憚代英にとり、不可解な事柄を強いて解釈しようとして神を持ち出すのは、「道理に合わない」ことであった。彼としては、不可解は不可解として、以後の科学の進歩に委ね待ち、性急に短絡的に「神とか自然とか」のしわざに帰するのは安易な結

論に他ならなかった。

さて九月一日、武昌に帰り着いた惲代英は、今回の夏令会の收穫について、次のように総括した。一つは、「高級のキリスト教徒に接したため、教義がよく理解できた。」二つは、「真に友とするにふさわしい人を数人得た。」三つは、「脳力・視力を休息させ、殆ど転地療養の効果があつた。」四つは、「そこでの人々の言行を見て、他人に完全さを求める害を悟った。」五つは、「そこでの祈禱と聖書研究の效果を見て、一日三省の必要を自覚した。」六つは、「信仰の益は心理作用から生ずるのであり（そこでの人々はこの言葉を信じたがらぬが）、従つてまた抹殺できないところがある。」七つは、「張福良・張永訓、鄭和甫、プライスたちと、一カ月後に『最良の非キリスト教徒の成績』を報告することを約束した。このことは自分の修養に必ずや大きな効果があるにちがいない」の以上七点であつた。

以上より、彼がキリスト教に改宗することはあくまで拒みつつも、醒めた眼でキリスト教を観察し、その長所は長所として認めて、それを自己の次の行動に活かしたいと考えていたことがわかる。そして今回の夏令会参加の大きな成果は、聖書研究と祈禱とが道徳修養上にもつ効力であつたと見られる。彼はいつも志を立てながら、その志に照らして自己の一日の言動を振り返り反省することを知らなかったがゆえに、折角の志がいつのまにかウヤムヤになつてしまつたことを想起した<sup>18</sup>。彼は祈禱の効力は、「盲信の力」と「自省の力」とによるとする。そして祈禱に代替するに曾子の三省の方法を用い、反省・点検項目を一つ一つ具体的にあげること、祈禱よりも更に大きな効果が期待できると考へついた。これが彼自身の三省文の毎月の誦読、また互助社の開会の冒頭の「互励文」の朗誦、及び修養の項目毎の採点などに結びつくものであつたらう。

しかしキリスト教の長所は認めても、キリスト教の教理に真理性を認めるにはついに至らなかった。彼は夏令会に集うキリスト教徒たちの、「嘉言嘉行、頗る観るべきものがある」ことには心を打たれた<sup>19</sup>。だがキリスト教を唯一の真理と認めることについては、彼等自身も教理について十分に矛盾なく説明できないことを指摘した。彼によれば、「大抵キリスト教は人が推理し解釈するものであるが、もはやそのとき完全にキリスト教の真義を得ているとはかぎらない。キリスト教の中にはさまざまな意味が含まれているのであつて、それは中国の仁とか義とかの字が多くの意味を含んでいるのと同じだ。孔子が集大成し統一したなど言う人があるが、みな正しいように見えて実は誤りである」ということになる。言うなれば、神学もまた儒教の經学（經書の創造的・解釈学）と同様なものだと指摘である。従つてキリスト教がその解釈のちがひによつて多くの派に分かれ、その正否は誰にも判定できなくなっているとの新しい認識を得て、彼のキリスト教批判の材料はより一層豊かになつたと見てよい。

さて夏令会の最中に、惲代英は、「キリスト教の精神を含ませない」、「自治的で、他治的でなく」、「利他的で、利己的でない」Good Student Society 結成のアイデアを思いついた<sup>20</sup>。そして武昌に帰るやその具体化に着手したが、一朝一夕には成らず、戦線を縮小して互助社の結成に向つたことは既に述べた。従つて武昌互助社の結成に、夏令会への参加は決定的な契機として作用したのである。それゆえその組織の性格、活動の内容は自らに規定されていた要するにそこに出現するのは、宗教色が消えたYMCAに他ならなかったのである。そしてその活動が、「修養し且つ社会のために奉仕する」内容を備えていけばいくほど、「最良の非キリスト教徒の成績」を誇ることができることにならう。



夏令会から帰って、一方で新しい組織の実現に努力すると同時に、憚代英はキリスト教の教理についての新しい知見にもとづいて『基督教平議』を書き、『新青年』に投稿した。しかしこれは10元の原稿料が送られてきたものの、掲載には至らなかった。<sup>(21)</sup>また『神之存在駁議』なる一文も草したいと構想していたが、これも流産している。また謝洪資の『基督教与科学』<sup>(22)</sup>を読み、自らの「懷疑論」の立場の正しさを再確認している。謝洪資の語るように今の科学は絶対ではない。だからといって、宗教的真理が科学的真理と両立し折衷できるわけではない。「どれが真理かは、私にはわからない。ただ慎重で性急に結論に走らないのが、最も安全な方法である」、これが憚代英の立場であった。とかく今の科学で説明できぬ事象に出会うと、科学の限界を決めつけて科学を超えたところに真理を見出すとする姿勢を、彼は厳しく戒めたのである。

また彼はYMCAの「通俗夜学」の授業を分担し、その社会奉仕活動の一端を担っている。だがこれは互助社の組織的活動としてではなく、彼の個人的活動であり、それゆえこれは「人を助ける」の項目に入れられていた。<sup>(23)</sup>他方YMCAの講演が時弊を衝いていても宗教ということで世に受け容れられないことがあるのを嘆じ、互助社が発達すれば、YMCAより更に多くの仕事ができ、大きな効果があげられるだろうとの期待を表明している。<sup>(24)</sup>

その他、キリスト教徒であれば当然一夫一妻主義を主張すべきなのに、かえってそうしない者があること、また夫婦と子供を単位とした小家庭主義を主張する筈なのにそれに反対する者が多いことをあげ、その教えと言動との背反を訝っている。<sup>(25)</sup>また専ら「奇蹟（神迹）」を使って伝道し、キリスト教排撃の動きが起るのを恐れて無闇矢鱈に信者を増やす、その宣教方法のあやまりも指摘している。<sup>(26)</sup>

従ってキリスト教徒と親しく交われば交わるほど、その内情もわかり、教徒の偽善性、教理への無理解、ライス・クリスチャンの多さといった否定的現象も眼につくようになったと見える。

そして互助社の中にも弛みが目につき出した十二月末、彼は「自分はいつもキリスト教徒の精神を羨望しているのに、志氣が十分に堅定・勇猛であることができないのは、自分に似つかわしくないと自らを鞭撻している。<sup>(27)</sup>そして、自分の知る最良のキリスト教徒に比べて熱意が劣るわけでもなく、また近來なしてきた事は、その効果も小さいとは言えぬと総括した。問題は、「互助社の事業を以て論ずれば、自分がいれば必ず繁榮し、自分が去れば荒廃する」ということであった。それは憚代英の能力の大きさを証明するものではない、彼と同水準に人々を引き上げることは、「まだできていないのみ」の憾みをもっていた。そしてこうした悩みを打開する道を探るためか、彼は一八年一月、冬令会<sup>ウィンターカンファレンス</sup>に出発する。

### 第三節 憚代英とYMCAの交流（二）

さてこの冬令会については、日記の摘要である『民国七年回想録』に参加の記録があるのみで、日記が残っていない以上、詳細は全く不明である。そして二月二十五日には最愛の妻が難産のため、嬰兒ともども死ぬという不幸な出来事が起り、日記はそれについての事実と自己の感慨、及び悲しみに押しひしがれつつも必死にそこから立ち直ろうとする痛ましい努力の跡とで埋められている。

以後、日記はいよいよ自己への詳細にして苛酷な評価・点検の成績通知表と化し、自己の人格の向上を図り、互助社のメンバーの信頼を深め、修養を促すことに精魂が傾けられている。自己が悲しみにめげず、良きお手本を示して修養に励むことが、メンバーを助け

奮起させていることほど慰めと誇りを与えるものはなかったのかも  
しれない。<sup>(28)</sup>そしてその結果、廖煥星が端風団を組織し、巡回講演、  
新聞閲覧所、女性の天足（纏足しないこと）の鼓吹など、大きな成  
果をあげているのに感嘆している。<sup>(29)</sup>また互助社が各学校に火花を散  
らしてつぐられ、それらの結社の連絡団体仁社も発足することがで  
きた。<sup>(30)</sup>憚代英は、能力ある人を助ければ少ない力で大きな効果が上  
がり、そうした能力のある人が多勢で協力すれば「風俗を改変させ  
る」ことができ、無能力で無自覚の人々にも大きな影響を与えるこ  
とができると抱負を述べている。<sup>(31)</sup>ともあれ彼の苦闘の結果、互助社  
は武昌の各学校に種を播かれ根を下ろすことができたのである。<sup>(32)</sup>

さてこうした実践のかたわら、彼は毎日少しずつフォスディック  
の『完人の範』を読み進め、四月二十五日、二十七日の二回にわた  
り、読後の収益を五点あげている。それは、「不揺不拔の寛大をう  
ち立てる必要性」、「仇敵を愛することは自分の悪念を化し、また他  
人の悪念を化す奇効があること」、「私怨を以て大事業の進行を妨害  
してはならない」、「人格はみな不揺不拔でなければならぬ」、「個人  
の力は全世界の未来を感動させることができる」である。そして翌  
二十八日、余家菊と『完人の範』を模倣した「修身日覧法」の作成  
について相談した。その結果、五月四日に一般の少年の自覚を促す  
ものとして、『淑身日覧』が出来上った。それは格言や、賢哲の言  
論や、短い人が人を実行に駆り立てる理論や、人に反省を促す問題な  
どを列ね、人にやる気を起させることを主眼にしていた。憚代英は、  
「この書はキリスト教の聖書研究用の本の体裁にならっているが、  
非宗教徒のためのものである」と述べている。

またこれと相前後して、『新約聖書』をのぞいて見たが、これは  
「得るところなし」と見切りをつけ、次に『青年会提唱者』、更に

『祈禱発微』『中国聖賢要道類編』を読んでいる。『青年会提唱者』  
には特に感銘を覚えたらしく、その沿革を日記に書きとめ、「互助  
社がどうして将来の青年会とならないことがわかろうか」と、互助  
社への期待をふくらませている。<sup>(34)</sup>また『淑身日覧』に続いて、『青  
年進歩』誌上の『児童健康十字軍』の真似をして、暑假自省表の  
作成作業にも手を染めている。<sup>(35)</sup>

ところで一八年の五月には、憚代英の周辺に二つの大きな事件が  
起きている。一つは、YMCAの講演会に、彼が演説の妙手と讃嘆  
していた余日章と、モットに次いで煽動的演説家として名高いエデ  
ィが登壇したことである。彼等の演説の内容、及び憚代英の反響  
については、第六節で詳しく述べる。この時、余日章と宗教や教育  
について、二時間ほど個人的に懇談もしている。また一七年の夏令  
会で旧知のジョーダンと武昌YMCA幹事で友人の汪強との二人か  
ら入信を誘われたが、それは堅く断った。伝道に倦まずたゆまず献  
身するその精神は「敬い見習う（矜式）べし」と感嘆しながら、入  
信については承認できない理由を三点あげている。それは、「上帝  
を信ずることができない、イエスを神の子と信ずることができない、  
信教は自己欺瞞にすぎず、修養と人を助けることとの双方に利点が  
ない」ということであった。<sup>(37)</sup>

さてもう一つの事件は、日中軍事協定の締結をめぐる動きに触発  
され、互助社が従来の修養団体の枠を突き破り、社会へ眼を向け始  
めたことである。五月十日、任啓珊から民新小学の子供たちが、  
「国恥を忘るる勿れ」のビラを貼り集会をもったことを聞いて衝撃  
を受け、人々に愛国の感情を喚起するために、国歌を作ることを入  
社で提案した。そして結局、張謇の詞を選び、曲をつけた上で音譜  
・歌詞を印刷して友人たち、及び音楽愛好者に配布し、自分たちも

盛んに歌った。<sup>(38)</sup> また五月二十日、日本の今回の「新要求二十条」を互助社の友人のカンパで直ちに油印に付して配布した。<sup>(39)</sup> 活版印刷を頼みに行ったところ、警察が既に前夜配布した油印のビラを手に入れ、印刷所に禁止命令を出していたので、やむなく再び油印で増し刷りをした程である。

更に国貨愛用を訴えるビラを作ると同時に、武漢地区の国貨調査を呼びかけ、その結果『国貨調査録』七千余冊を印刷して配布した。<sup>(40)</sup> その過程で工場見学に出かけたりして、中国の実業の実情についてもその一端を知ることができた。<sup>(41)</sup>

その中で彼は、今迄の口舌や文筆による活動の他に、実際に行動する、即ち「力行」の重要性を覚られ、『力行救国論』を書いて<sup>(42)</sup> いる。そして互助社の「互励文」の中に、危機的情況にある国家のために尽力し、国家と社会のために「伺候」するという内容を盛り込んで<sup>(43)</sup> いる。更に、「民智の開通」のために学生たちによる移動講演団の設立を計画したり、<sup>(44)</sup> また鄂園を借りて小学生倶楽部をつくり、自学自習と健全な娯楽の場を提供し、また日曜日には学生の交友の場としても開放して、「無宗教の青年会」となすことも計画した。<sup>(45)</sup> 前者は全くの構想倒れに終わったが、後者は実現しなかったとはいえ、かなりの具体的交渉を行った模様である。

ともあれ中学生たちの間に互助社の種が播かれ、五月十五日、輔仁社が成立した。この団体は、「三育（智育、德育、体育のこと——後藤注）を並重し、童子軍のやり方に倣って一週間一回会合をもつ」ことを決めていた。そして更に互助社の枝分かれした団体が続々と誕生しつつあるとの知らせに、憚代英は「中国復活の兆し」を読み取り、狂喜のあまり眠れない程であった。<sup>(46)</sup> また互助社の仲間の間から、互いの本を持ち寄り、学友たちに開放して貸出もす

る公共図書館設立の議が起り、中華大学の教員接客室を借り「啓智図書館」を設けることになった。以前から中国の大学生の学術水準、研究能力の低さを憂え、学校での学課以外に広く自由に研究する場を欲していた憚代英にとり、願ってもないことであった。<sup>(48)</sup>

さてこのように、一八年の五月を機として、互助社は仲間内の閉鎖的な修養団体から大きく飛躍して、社会へ、政治へ視野を広げた、社会奉仕団体へと脱皮を開始した。学校青年会にならい、「修養し且つ社会のために奉仕する団体」を結成するという当初の目的に、漸く近づきつつあったと言いうことができる。憚代英が種を播き、粒々辛苦のすえ守り育てた若芽が、逞しく成長し、花を咲かせつつある場面が訪れたわけである。

そしてこの一七年七月二日、憚代英は中華大学を卒業し、学生の身分を離れることになった。進路については、紆余曲折の末、学長陳時の懇望・説得に従って、母校の附属中学部の教務主任に就き、そのまま武昌に留まることになった。そしてその翌七月三日、憚代英はまたもや五日から十一日まで開催された、廬山の夏令会に出発した。今度は互助社の仲間六人、及び他の学友と総勢十一人での参加であり、帰途、上海に立ち寄り予定も立てていた。

さて今回の夏令会に臨むに当り、憚代英には二つの目的があった。一つは、その成果が目覚ましい「キリスト教徒の事を行う方法」に意を注ぎ、そのノウハウを学び取ることであった。<sup>(49)</sup> 二つは、「最良の非キリスト教徒」となることが可能か、いかにすればそれが実現できるかを見定めることであった。やはり、「私の経験からして、熱心に人を助けるキリスト教徒には、自ら引き比べてひけ目を感じるのみ」<sup>(50)</sup> であり、「極く少数の高尚なキリスト教徒」には脱帽せざるを得なかったのである。彼等の能力と品格のよって来るところを

再度じっくり見極め、確認する必要を痛感していたからである。

そして第一の目的のため、彼は夏令会の最中、そこで購入した『学校生社会服務之研究』をずっと読み進めている。今迄学生として互助社を組織して、漸く社会奉仕に導くことに成功し、秋からは中学教師となる予定の憚代英は、とりわけ学生の社会奉仕活動の進め方には熱心に研究する必要があった。彼は書中に参考となるべきことをメモしたり、新入生への始業式の際の対応などを検討したりしている。<sup>(51)</sup>彼は特に口舌による「弁難」よりも、「実行」の重要性をあらためて確認し、他校の人々に、五月以来自分達が実践してきた国貨を用い、国歌を歌うことを提案した。だが思わしい反応は得られず、憚代英は、「虚浮の事はなし易く、切実の事はなし難い」ことを悟らされた。それゆえ今後の学生指導に当り、「切実」と「活動」の二事に注意することを自己に促している。<sup>(52)</sup>

また聶雲台の実業界の人材の備えるべき要件の講演を聴き、その八項目をすべて書き留めている。<sup>(53)</sup>特に今回の夏令会は、「択業会」を設け、職業選択の基準、教育や伝道や実業などに携わる人材に要求される資格などについての経験を聴く機会が多く、教師として社会に出る憚代英は有益な示唆と教訓を与えられたようである。

さて次に第二の目的について、憚代英は「最後の審判」や「禍福」を振りかざして、「最良の非キリスト教徒」たることは不可能との主張に反駁する。<sup>(54)</sup>彼は、「余は死後の審判を顧みず、ただ人に益あるを求めるのみ。たとえイエスを信じないで地獄に堕ちても恨みはない」、「信教も不信教も皆ひとしく盲行であり、禍福は結局予言し難い。もし真のキリスト教徒に成功しない者はないと言ふのなら、最良の非キリスト教徒も失敗する者はいない」と言う。要するに、神を信ずるか否かが問題ではない。問題は、「無私」で「犠牲」

の習慣と品性をもち、「堅忍して倦」むことなく、互いに助け合いつつ善人の勢力を造り、それによって国家・社会の改造を着実に実行していくか否かにある。むしろ「最後の審判」を語るのは、「天に昇り帝に親しむの欲望をもつ」ことに他ならず、墨子の兼愛の犠牲に及ばないとまで言い切る。

従って、「何をなすべきかを知ること」が即ち「最良の非キリスト教徒」に求め至るの道筋であった。そして「極く少数の高尚のキリスト教徒」の能力と品性とは、神を信じているか否か、祈禱を用いるか否か、によって決せられるのではない。それは、「愛の力」、「互助の精神」、「道徳の実践」によると言う。<sup>(55)</sup>憚代英は、キリスト教徒の「好んで清潔高尚不驕傲の地位に居り」、自己の能力と品性を誇り、非キリスト教徒を見下げ憐れむ独善的態度を鋭く指摘している。また憚代英がかねてより感嘆してやまないキリスト教徒の倦まずたゆまずの不屈の精神を喚起する方法として、聖書研究から有力なヒントを与えられている。彼は、昔の賢哲の言葉や格言を研究し、『淑身日覧』を更に改編して油印または活版印刷により刊行するのも一法だとする。また国歌や校歌、及びその他の壮麗な歌を歌うことも有効だと思いついている。<sup>(56)</sup>

従って以上から、キリスト教に入信せずとも「最良の非キリスト教徒」たることは十分に可能であった。またキリスト教徒に一層まさる能力と品性を身につける方法を知ることができた。そして彼は今回の夏令会を通じて、キリスト教徒の行動、及び中国のキリスト教のあり方について、重大な欠陥、問題点を明確に認識することができた。

まずキリスト教徒の行動について、憚代英は言行不一致が多いこと、また改革の方法は賑やかに議論しても、それを真摯に着実に全

力をあげて実行せず、単なる「空談」に終ること、の二点をあげる。<sup>(57)</sup>特に今回の夏令会が事前の予告と大幅に違い、余日章や鄭和甫が来なかったこと、スケジュールや進め方が守られなかったこと、そしてそれについての釈明や謝罪がなかったことは、憚代英をいたく憤慨させている。また宿舎に鍵をかけることを再三要求しても容れられず、自分が預かっていた林育南の金の指輪が紛失したことは、自らの不用心さへの自責の念と相俟って、大きな衝撃であった。宿舎に鍵をかけなかったため、適当にサボって宿舎にこもる人もいたらしい。こうした不手際、無秩序は、概して「宣教を過重視」する主催者側の姿勢によるものと、彼は不満を吐露している。

ところでそもそも夏令会とは、主催者側の意図としては、合宿という形を通じて日々キリスト教についての情報を注ぎ込み、密度の高い接触を通じて信者を獲得する絶好のチャンスと位置づけられていたことは、まず疑う余地はない。<sup>(58)</sup>従って「宣教を過重視」するのは当然であったと言える。それゆえこうしたカンファレンスに三度も参加しながら、容易に入信しないばかりか、参加者にキリスト教への懷疑や不信の念を起させかねない影響力をもつ憚代英は、かえって困りものであったのかもしれない。

さて次に中国のキリスト教のあり方についてである。憚代英は今回の夏令会で、キリスト教の独立と伝道方法の改良との二事が、中国キリスト教の一大問題だと認識するに至っている。<sup>(59)</sup>まずキリスト教の独立とは、要するに、「現今の宗教家は外国人の扶助を受けていることによって愛国心の薄弱なものが頗る少なくない。だから独立しないわけにはいかない」ということである。これは中国キリスト教にとって極めて大きな欠陥であり、教徒、非教徒を問わず、気づき易く批判の集中するところであった。問題はその独立の能力の

有無にあり、憚代英は性急に走らず、理想に走らず、時機を見て着実にこの一大事業の達成を願ひ励ましている。

次に伝道方法の改良とは、まず第一に、「最後の審判」により地獄に堕ちるとか、禍福による一種の恫喝や利益誘導のやり方、次に第二に、高みに立って蔑み、憐れみ、救ってやると云った居丈高なやり方、第三に、何が何でも改宗させようとするやり方、また前述した如き、「排教の風」を引き起すことを恐れる余り量的拡大を急ぎ、ライス・クリスチャンを激増させるやり方があげられよう。<sup>(60)</sup>その他、伝教方法の改良としてではなく、憚代英が宗教を信じない理由としてあげる三つの事柄も、大いにそれと関連があるとしてよい。<sup>(61)</sup>

第一は、「合理的証明（理証）」がまだ完全でない」ことである。

これは、「奇蹟（神迹）」を用いる、イエスを神の子とするとか、を指すものと見てよい。憚代英が『新約聖書』を少し覗いて、「得るところなし」と放擲したものも、多分に処女懐胎などを荒唐無稽として嫌悪したからに他なるまい。

第二は、「習俗に違背している」ということである。これは西洋直輸入の方法に頼り、民族の歴史的文化的伝統をふまえ、民衆の生活や要求になつた伝道方法を模索する努力を怠っていることを指すものと思われる。<sup>(62)</sup>第三は、「人に事をなすを勧めるのに都合が悪い」ということである。これは他の宗教をもつ人やキリスト教に嫌悪感を抱く人に徒らに警戒感を起させ、かえって逆効果を招くことが多いのを懸念したことと思われる。

さてこの中国キリスト教のあり方についての二つの問題点の指摘及びその解決について、「同志を徐々に結び、勇猛にしかも慎重に進める」ようとの勧告は、汪強から感動を以て受けとめられた。汪強の「教会の改革を自らの任務としたい」との回答に、憚代英は、

「果して彼等は宗教で国を救い、我等は教育で国を救えば、国事に於てどうして小さな利益であろうか」と記している。<sup>(63)</sup>

さてこの七月五日から十一日の、昨年とほぼ同じ朝六時起床から始まるスケジュールのしめくりの行事が、「定志会」であった。

そしてこれは、前述した夏令会開催の狙いからして、入信の決意表明が次々に行われ、涙と感動のフィナーレとして盛り上がるのが常であった。<sup>(64)</sup>しかし憚代英がこの日にキリスト教徒に改宗するであろうとの神のお告げが三回もあったとして入信を促すブックマンに対して、彼はその伝道の熱意に打たれながら、「しかし独り倔強の余において、かつて何の益もなし。余は他の方面において頗るその教の利益を得た」と斥けている。

そして憚代英は、教徒となる決意をした人々に、「力行を忘れるな」の言葉を贈り、また宗教の独立と伝道方法の改良との二つについて激励したにとどまった。そしてこれが、彼の最後の夏令会参加となった。

ともあれかくして夏令会は終了し、憚代英は武昌に戻った。そして秋から母校の附属中学の教務主任に就き、「教育で国を救う」事業に乗り出すことになった。そして日記は夏令会からの帰途で中断し、就職後の実務の多忙のためか、一九年一月一日まで空白となっている。

さて一九年に入ると、一八年の『淑身日覧』、『暑假自省表』をもとに、『寒假自省表』を作成して印刷の上、生徒に配布し、日々的人格向上の努力を訴えている。<sup>(65)</sup>教師として自分より年若い少年達に接する中で、知育とは「伝道」に他ならず、「人に信從悦服させる」ことだとのヒントを与えられたり、イエスの「敵を愛すること友の如くせよ」の言葉で、自らの怒れる心を懲らしめる最良の方法であ

ることを悟ったりしている。<sup>(67)</sup>また仁社の毎日の自己反省において、聖書研究の際の一つ一つ具体的に問い詰める方法の採用が有効だと知ったりもしている。<sup>(68)</sup>

また組織のあり方としては、憚代英の念頭には常にYMCAがモデルとしてあったと見える。余家菊が中学部の演説会でYMCAの組織方法に範を取ったのに対し、その将来の成果を大いに期待している。更に五四運動の後に『全国学生聯合会意見書』を起草しているが、その中で、各地の学生聯合会に学生倶楽部を設置するよう提案している。<sup>(69)</sup>これは学生の道德上知識上の互助を支援する趣旨の下に、ほぼYMCAの組織方法に倣い、図書室、遊戲室、運動場を設けるといいうものであった。その運営は、各校選出の運営委員四名が毎週会議を開いて責任をもち、運営費は学生達のキャンパと会外の任意キャンパによりまかなう。このクラブは別に集会場と談話室を設け、有名人の講演、外部との懇親、学生達自身の集会、自由談話の用に供することとする。勿論これは全くの机上のプランに過ぎなかったが、彼の脳裏にはYMCAの組織方法、活動形態が常にモデルとして宿っていたことがわかる。

また一九年十一月には、「理想の夏令会」のプランを練っている。<sup>(70)</sup>憚代英によると、以前の廬山での夏令会を回想し、「つねに非宗教の夏令会を夢想していた」とのことである。それは名勝の地に、約七日間合宿し、互助・奮闘・改造の思想と品性をもつ友人達が集合して、講演会、読書会、研究会、交際、遊覧、知識交換会、自由談話会などのスケジュールの下に、相互の切磋琢磨を行うものである。勿論これは夢想にすぎない。が、一九二一年夏、黄崗林家大湾で各地に散らばっている利群書社の友人たちが集まり共存社を結成した三日間の合宿会議には、或いは理想の夏令会のイメージが託さ



れていたのかもしれない。<sup>(71)</sup>

勿論、一九九年においてもYMCAとの日常的な往来は変りなく続けられていた。<sup>(72)</sup>そして八月には父と弟と憚代英の三人連れで廬山を訪れ、その旅の途上でブライスに会って、本を借閲したり、また買い求めたりしている。<sup>(73)</sup>廬山の魅力もさることながら、YMCAとの関わりも、憚代英の場合、簡単に断ち切れるほど外在的、偶然的なものではなかったと見ることが出来る。それゆえYMCAとのこうした深い関係を見落すと、五四時期の憚代英の思想と行動、及び互助社の性格について、その真の姿を見誤る恐れがある。

さて以上を確認した上で、次に、なぜ憚代英はこれ程までにキリスト教にこだわるのか、キリスト教のどこに学び取るべき魅力を見出したのか、にもかかわらず入信を拒否するとしたら、それはいかなるもので代替されるのか、などについて眼を移すことにしたい。

#### 第四節 「良心」の発見

憚代英はキリスト教の真理性については、ついに一度たりとも認めることができなかった。だがキリスト教徒には敬服し、彼等との交際にはむしろ積極的であった。その理由は何か。それは、教徒の品性の高さと、倦まずたゆまず伝道を続ける情熱・根性（毅力）・意志とに心打たれたからである。勿論そうしたキリスト教徒は、「極く少数の高尚な」人々に限られ、「キリスト教徒すべてが能力があり、品性がある」などは不可能であることは、百も承知のことであつた。

それゆえ、「もし非キリスト教徒がみな能力がなく品格がなく、必ずキリスト教徒に及ばないと言うなら、古来一般の忠烈の士には、どのように対処したらよいのか。だから人は実心がないのが問題だ。

実心があれば、非キリスト教徒も善人となり、実心がなければ、キリスト教徒でもダメだ」<sup>(74)</sup>と言う。要するに信仰の有無ではなく、「実心」の有無がカギとなる。ところで「実心」とは何か。「実心」は日記中に数カ所の使用例が見られるが、心の奥底からのまごころといった意味と思われる。時として、「誠」、「誠心」を用いる場合もある。<sup>(75)</sup>

憚代英はまた、「私はつねにキリスト教徒の精神を羨望しているが、志気は十分に堅定・勇猛であることができない」と嘆じたり、「我等のかくの如き進行は、信仰がないとはいえず、精神はキリスト教に譲らないであろう」と自負したりしている。<sup>(76)</sup>そしてこの「精神」とは、例えば「遅く起床。人を助けたことで就寝が遅かったためだが、精神は甚だ良好だ」<sup>(77)</sup>の使い方とほぼ同じと見てよい。とすると「精神」とは、エネルギーの充溢した状態、元気でやる気満々、といった意味に解することができる。

そしてまた憚代英は、「陽明は良知を致し、その徒の発奮有為、頗るキリスト教に近い。いずれも一は上帝を待み、一は良心を待んでいる。私もまたほぼ良知の説を採り、以て自ら成就したい」とも述べている。<sup>(78)</sup>要するに、発奮有為の効果をもたらささえすれば、必ずしも神を信ずる必要がなく、陽明の「致良知説」でも十分に間に合うということである。

従つて以上をつき合わせ考えると、「実心」に込められた意味は、不退転の意志力、積極的意欲、不屈の熱意といった方向で解するのが最も妥当なように思われる。言い換えると、正義であり善と認められる道德行為を果すため、不断に自己を鞭打ち励まし実践させる勇氣、情熱、精神的昂揚の持続、といったものと見てよい。人間は善と確信していても、他人からバカにされたり謗られたりすると、<sup>(79)</sup>

「退縮の心」が生じ中途で挫けたりすることが多い<sup>(81)</sup>。また理性では正しく善であるとの信念をもっているが、「自私の心」や「懶惰の氣習」に妨げられ、「自己を犠牲にして道徳を踐履する勇心」を喪失して不道徳に転落する場合もある<sup>(82)</sup>。

ただキリスト教徒は神を信ずることによって、その結果として得られる「心理的作用」である道徳的勇氣を我がものとしている<sup>(83)</sup>。その祈禱や、聖書研究や、教会での集いや、讃美歌や、人を助ける行為や、社会奉仕活動などは、神への信仰を深め強めると同時に、信者としての自覺を喚起し激励する有効な仕掛けであった。そして夏令会でキリスト教徒の活動のしかたをじっくり観察する機会を得た憚代英は、信者の高潔な人格とその強靱な意志力との秘密を彼なりに探り出すことができた。そしてそれはほぼ三点に集約できる。

一つは、祈禱や、聖書研究における人を感動させ鼓舞する名言、及び讃美歌の効力である。彼は祈禱の代わりに、曾子の三省文や互助社の「互励文」を提起した。聖書研究における名言の代わりに、格言や賢哲の言葉などを善行に駆り立てる短かい文句を提起した。讃美歌の代わりに、荘嚴な歌を提起した。二つは団体の効力である。彼はYMCAの集まりの代わりに、「修養し且つ社会のために奉仕する」サークル互助社の結成を提起した。三つは、神を信じ持つことの効力である。彼は「上帝を待む」代わりに、「良心」を待み、王陽明の「致良知説」の採用を提起した。

さて二つめの互助社における「自ら助け人を助ける」ことが齎らす効力については次節で検討することとし、ここでは三つめの「致良知説」の採用について考察することにした。一八年六月一日、憚代英は『青年会提唱者』を読み進めつつ、次の様に記している。

青年会創立当初、会務中に正午の祈禱会があった。このやり方

は敬虔な商人がみな心を清<sup>す</sup>ませ徳を聖<sup>ま</sup>くするのを助けるのに十分だと考えたからである。思うに正午は人事が漸く多く、平旦の氣が漸次退く頃で、私は以前に道徳談話は早晩にすべきだと主張したが、今から見ると、正午の方が非常によい。

以上は、「平旦の氣」が正午に近づいてその清澄さが薄れて昏濁して来ることが、人間の良知の発現を蔽い妨げ、道徳心の低下に連なると見ていたことを示している。ここにあるのは、正しく孟子以来の伝統的な「養氣」の修養法に他ならない。互助社の散会に当り静坐をして、呼吸を百回数える<sup>(84)</sup>（後には開会時の五分間の静坐に改めている）、また「互励文」の劈頭に、「私は心を平らげ氣を静めて私達みんなを代表して語り、私達の良心を証拠立てたい」とあるもの<sup>(85)</sup>、やはり同様なものと見てよからう。

そして、「自分たちはぼんやりと志向があるようで、しかしその志向はまた真に確定していない。……これを救う方法は、この志を常に提醒して、ぼんやりした状態の中に居させないことである。

……提醒すればするほど清明となり、悪習が乗ずるのを心配しなくてもよい<sup>(86)</sup>」、「毎日格言書を読み、つねに本心を提起し、更に鞭策を加えれば、自ら疏忽怠<sup>おろそ</sup>け<sup>おろそ</sup>せず<sup>(87)</sup>」についても、伝統的な儒教の修養法そのままを認めることができる。更に、「最初の一念が利害關係によって混乱させられるから、良心を欺騙する欠陥が発生し、以後ますます道徳感情を利用することがわからなくなる」や「是非の上から、大群の利害の上から考え、この清明の良知に個人の私欲の關係を混入させてはならない」などとあるのは、恰も陽明学の「致良知」の教えを聴くが如き感がする。

さて以上の如き伝統儒教の修養法と見紛う修養法がどうして出現したのか。キリスト教の「上帝」に対抗して「良心」に待み、王陽

明の「致良知説」を意識的に採用したことにまずは起因すると見るのが自然ではある。そして憚代英の互助社の修養、及び一九年一月の『寒假自省表』の中に読み取れる色濃い道德主義的、精神主義的色彩も、多分にそのことに起因すると見ることが出来る。

とはいえ問題はそれですませることが出来るかということである。問題は、憚代英の修養法と伝統儒教、とりわけ陽明学の「致良知」の修養法との関係はいかなるものであったか、両者の酷似した関係は、日記中を通じて変化が見られなかったのか、ということである。なぜなら、そもそものはキリスト教の神への向うを張り、陽明学の「致良知説」を採用したにせよ、彼がそのとりことなつて脱出できなかったならば、その経緯はいかにあれ、両者の関係はやはり本質的なものと看做されるからである。従つて両者の関係が偶然的、一時的なものか否かを見極める必要がある。さもなくば、憚代英は陽明学の影響下にあつたと結論されることになる。

さて内村鑑三『代表的日本人』の西郷隆盛の項、及び隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』第一章の如く、キリスト教と陽明学の近縁性、及び日本の明治初期のキリスト教理解に陽明学が有力な手がかり、橋渡しとして作用したとの説がある。先ずこれが憚代英の場合に適用できるか否かを検討しておく必要がある。

憚代英の日記中に屢々登場する二人の人物がいる。一人は預科時代から大学卒業まで同級生として、憚代英のよきライヴァルであり親しい友人である余家菊（景陶）である。<sup>(89)</sup>他の一人は中華大学の政治経済別科で学んだ陳啓天（修平）である。<sup>(90)</sup>二人は一八八年秋から憚代英とともに中華大学附属中学部で教鞭を執り、ともに少年中国学会の会員であつたが、後に国家主義派に属して憚代英と袂を別つてゐる。さて彼ら二人の回憶録によると、湖北省で陽明学を提唱した

人物として有名な、黄坡の劉鳳章（文卿）が、中華大学の学長に任じており、倫理学を講じたという。また課外に毎日曜日「文会」を開き、講演と文章作法の指導とを行い、毎会百名余りの学生が参加したとのことである。余家菊は、「われ少年陽明学を転心先生に受け、敢えてその知る所を行い、すでにこれ自ら誤ること少なからず。同輩を黙察するに、死に至るも悟らざる者これあり、禍を覚らざるに遺す者もまたこれあり」と述べている。そして預科時代に編入して以来、本科文科中国哲学門の一貫して同級生であつた以上、憚代英が劉鳳章の講義を聴いたことはまず確実と見てよい。

だが中華大学発行の『光華学報』第一年第一期（一九一五年五月）によると、劉鳳章は「倫理学はまさに孔教を以て基礎となすべきを論ず」を掲載し、憚代英は「新無神論」と以前同人雑誌『道枢』に載せた「懷疑論」の一部とを掲載している。それゆゑ両者の内容からして、全く相容れない思想的立場に立っていたことは明白である。また一八年五月二十三日の日記には、国貨提唱のために劉鳳章にカンパを頼み、憚代英らの趣旨に不賛成のため断られたことを記している。更に廖煥星「武昌利群書社始末」によると、五四運動に引き続き、旧礼教反対、經心学院派の切りまわす暗黒教育反対の宣伝を行い、その中で林育南主編の『向上』が、最も精彩に富み、「湖北の学閥劉鳳章を攻撃するのに最も力があつた」と述べている。確かに『自訟語』（一九一六年八月）には「自ら良知を欺く」の語が二つ見え、彼自らも陽明の「致良知説」を採用すると言ひ、『寒假自省表』には伝統的修養法を説く言葉がもられている。<sup>(92)</sup>しかし日記中には「良知」よりも「良心」が圧倒的に多用され、しかも一八年、一九年と後になればなるほど「良心」出現の頻度が増している。更に『寒假自省表』はそもそも余家菊とともに作成した『淑身日

覧『暑假自省表』を補訂して完成させたものであり、あるいは余  
家菊の考えが多分に混入していることも考えられる。従ってこま  
まですぐに陽明学の思想的影響を結論するには些か躊躇いが残らざ  
るを得ない。

次に内村鑑三、隅谷三喜男の説では、陽明学が良知説を唱える  
同時に、「仁慈且つ峻厳なる天の法則（天理）」を唱えることをあげ、  
「良知（良心）」を強調した陽明学は、それによって倫理を内面化し、  
天理を人格化して、『主の道を備え』たのである」とする。これは  
或いは西郷隆盛などの例には当て嵌まるかもしれない。だが惲代英に  
は、「心即理也、此心の私欲の蔽ふなき、即ち是れ天理<sup>(93)</sup>」の、良知  
の良知たる所以を天理に求める発想法は全く見られない。彼には朱  
子学、陽明学に共通な天人合一的自然法的思维は見当らない。従っ  
て、良知が天理とワンセットをなしていないかぎり、陽明学を名乗  
れないのであり、陽明学の思想的影響を簡単に結論するわけにはい  
かない。

ところで惲代英は、キリスト教の神に対して「良心」を持ち出し  
た。だがその「良心」は、天理の人間への先験的内在ではない。惲  
代英は、「人には善をなすの意志がある」との説には承服してい  
ない<sup>(94)</sup>。だとすると、何が道徳的に善であり何が不善であるかを判定  
するのは誰か。キリスト教の場合、道徳的善非善善悪を決するのは、  
万物の創造主、全能の支配者である神であり、道徳は神の聖言、神  
の命令に他ならなかった。

惲代英の場合、神もいなければ天理もない。あるのは個々人の  
「良心」だけである。だとすると、自己の内なる「良心」を道徳的  
立法者、唯一の絶対的な道徳的判断基準として認める他はあるまい。  
そして以下の二つの発言は、各個人が各々自己の「良心」の命ずる

ままに行動する、一個の道徳的主体として認められていることを物  
語るものと言えよう。

修養と事をなすとの標準は各々良心に順い、強いて同一にす  
る必要はない。たとえ甲のなすことに乙が絶対反対でも、ただ  
忠告するだけで、押しつけはしない。このようであれば人情に  
順い効果が上がり易い。自身の修養のために来た人であれば、  
断じて自己の良心を口実にして悪をなす道理はないでしよう<sup>(95)</sup>。

是非の争いは昔からある。究極の真理を求めるのは、もとよ  
り重要だが、それを必ず求めることができて、その後安心立  
命の境地が得られるとするなら、そんな日がいつ実現するかわ  
からない。だから個人にあつては良心の命令に従っておけば、  
中らずと雖も遠く外れはしないだろうし、社会にあつては公け  
に決められた法律が多数の意見に従っておけばよい<sup>(96)</sup>。

惲代英にとり、道徳は他から命ぜられた所与の規範ではなく、自  
己の内面の呼び声・要請に他ならなかった。そして特に一九年にな  
るにつれ、「良心に憑る」とか、「良心を以て事理を判断する」とか  
「良心の命令するところの言葉」とか、「良心に問う」とかの文言が  
頻出するようになる<sup>(97)</sup>。

そして彼が「倫理改革の大業」に乗り出した第一歩を示す『我之  
人生観』は、人類の生存を一旦動物のそれと同一視し、そこからそ  
の無目的、無価値を導き出して、一切の目的論的人生観の虚妄性を  
打破し、各種の先験的道德学説の成立根拠を奪った。と同時に彼は、  
生物としての人類の生存の原点から、新たな道德学説の樹立に出發  
したのである<sup>(98)</sup>。従って彼の場合、「良心」、即ち人間の内にある道徳  
的命令者とは、他に対する「同情の衝動」の一部分と、「反復実践  
して習慣によって遺伝となった本能」とに起源をもつことになる<sup>(99)</sup>。

それゆえあくまで人類の生存という地上的此岸的なものに道德の基礎を見出そうとするのが、憚代英の根本的発想に他ならない。天上の神に、あるいは天理に、人間界の道德の指針を求めようとする、キリスト教や陽明学とは、全く方向を異にしていると言ふことができる。

従つて憚代英の場合、キリスト教の神に対して「良心」を掲げることにより、人間は道德的命令者、道德的責任主体として、神と対等の地位に立つことができたと言える。言わば、キリスト教の神を否定的に媒介することにより、人間各人が、自己の内なる道德的權威の命ずるままに行動する、自由で主体的な近代的人格概念の近くまで達したとすることが出来る。勿論憚代英には、人間の内面にある道德的命令者としての「良心」の発見に至るまでは、孟子以来の伝統的な「良心」との混同もあつたであらう。また言表するに十分な概念や表現形式の成熟を獲得できなかった時期も続いたにちがいない。そしてそのような過渡期にあつて、まずは聞き慣れた王陽明の「致良知説」で一時的に間に合わせることもなつたのであらう。それゆえ人間の内にある道德的立法者としての「良心」の方向が明確になりつつも、時として「良知」に引き戻されて、混乱を示すことも無くはなかつたと見てよい。

そして一時的にせよ「致良知説」に依拠したがゆえに、互助社の初期の修養が、観照的で道德主義的、精神主義的色彩を濃く帯び、中国の伝統的修養法に似通つた外観を呈したのである。勿論、中国の長い修養の思想的伝統が、その中で生い育つた憚代英らの中に無意識裡に浸透し、そこから抜け出すのは容易なわざではなかつたという事情も見逃がせない。ともあれ一八年五月までの互助社は、専ら人格の修養に比重が置かれ、「修養し且つ社会のために奉仕する」

との当初の目標からして著しく跛行的であつた。それゆえその時期の修養が、伝統的修養法に酷似する面をもつていたことは否定できない。従つて陽明学の影響云々もある程度承認せざるを得ないかもしれない。しかしそれは表面的な借物であり、いずれその内部にあるものが成長してそのカラを打ち破つて自らの真の形を現わし、表面の相貌まで一新させるとすれば、それは本質的、必然的な影響であつたとは言えないだらう。

さて以上のダメ押しをするためにも、いまだ「良心」の命令の内容を見ておきたい。

驕<sup>か</sup>に乗るは、一人の逸<sup>う</sup>を以て二人を勞せしむ。殊に良心の許すところの平等の義と相悖<sup>さむか</sup>く。人力車も同じだ。

私達は人類の福利のために、ゆえに良心上この説を信ずる。決して取り入つたり、見せびらかしのためではない。

さてお尋ねしたいが、集合する以外に、救国の方法はどうなのがありますか。政府がついぞ目覚めないのは、特に残念でたまりません。もし不幸にして湯武の事があれば(暴を以て暴に易う——後藤注)、私は救国の根本方針とは考えませんが、しかしそれを押しとどめ阻むべきではありません。……良心によつて言えば、それらの人に非難を下すことはできません。

また「良心」に対する言葉として、憚代英の日記中には罪惡という語が頻繁に使われる。その場合の罪惡とは、法的意味のそれではなく、むしろ内なる良心の呼び声に従わなかつたことに起因して生ずる、罪惡の意識を指すものと見てよい。そして次のように言っている。

服従は美德かもしれないが、反抗精神は道德の完成に更に大きな関係がある。なぜなら敵師、益友、父母、妻子は、みなその

品性に遺伝による染色と大衆的悪習の熏染とを受けている。だから有形無形の裡に我々を罪惡に誘つたり強制したりする。我々を救うのは、ただ反抗精神をもつことだけだ。

この罪惡も良心に咎める、道德上の罪惡である。そして伝統道德の見地よりすれば、それはむしろ罪惡どころか、表彰ものであったに相違ない。師に従順な学生、友人の言を素直にきく友情に厚い人、父母の孝子、家族のために自己を犠牲にする家族制度の忠実な義務履行者が、賞讃されない筈はない。

従つて以上のいくつかの引用例から見と、「良心」の命令は、伝統儒教の一定の内容と方向性をもつた道德的當為とは全く別物であることがわかる。外的な伝統的規範や人間関係のしがらみに屈せず、個の自立、自由、平等、愛国、人類の福利といった近代価値を實現するため、自己の良心の呼び声に真摯に耳を傾けて敢然として突き進んで行く、こうした自由で自律的な人間、これが惲代英の「良心」を恃む人間の行きつくところであった。勿論、個々人は一人一人違つた価値觀の持主であれば、各々の良心の指し示す方向にも相違は当然ある筈であり、「強いて同一にする必要はない」のである。そしてこうした近代的人格をもつた人間像の誕生は、キリスト教の「上帝を恃む」に対して、「良心を恃む」ことから齎らされたものであり、キリスト教の神が否定的契機として媒介していたのである。従つて近代的人格を成立せしめ、且つその統率者としての「良心」の発見こそ、この時期の惲代英の思想の成果として、特筆に値するものであった。そしてキリスト教の神がその発見の助産婦として大きく関与したということは、中国近代思想史におけるキリスト教の果たした役割、意義を考える際に、大きな示唆を与えてくれる。

さて「良心」が自立した個々人の内面的主体性を支えるものとな

つて行くのと平行して、惲代英は「力行」、「身体力行」、「切実」、「活動」、「実行」を語り始める<sup>(10)</sup>。仲間内の閉鎖的な修養に止まっていた互助社が、一八年五月の日中軍事協定反対運動を機に、国貨愛用を呼びかけ、国貨を調査したり、国歌を印刷したり、急速に政治や社会に視野を広げたのである。従つてそれを契機に、互助社の修養のあり方も、従来とは大幅に変化して行かざるを得ないであろう。一八年の夏令会で彼は次のように述べている。

人はもし実行の習慣がなければ、論難して解決を得たとしても、その実行には無益である。……もし敢えて実行して入信できれば良い教徒となり、入信できなければ善人となる。このように伝道すれば、キリスト教に利益がなくても、結局、国家に有益であり、終日上帝だのイエスだのの利害をがなり立てるよりましである<sup>(11)</sup>。

またその夏令会の最後の夜、キリスト教に入信の決意表明をした人々に、「力行を忘れるな」の言葉を贈っている<sup>(12)</sup>。救国、愛国のために役立つ人間となること、これが互助社の修養の最大の目的となり、「互励文」の中にそれが盛りこまれるに至つた。そして各メンバーは、各々国家や社会のために有益な活動に参加し、その一端を担い、その中で自己の品性の修養に励むことになった。

惲代英は一八年秋から中学部の教員として、「教育救国」の具体的実践に踏み出すことになった。そして一九年五、六月の五四運動を経験し、はからずも武昌の学生運動の指導に当る結果になった。

その中で、「合群」の修養、「公共生活の修養」、「力をあわせて一緒に行う」修養の必要性を痛感するようになった<sup>(13)</sup>。と同時に、「つまみどころのない曖昧な空っぽで中味のない道德講話」ではなく、「高尚・純潔な平民精神、勤労服役の習慣」、時事に対する「系統的



知識」、人生と社会問題とに対する「明確な見解」、品性上の「堅忍して動揺しない節操」の涵養の重要性を認識することになって行く。

## 第五節 「自助」と「助人」

一七年の日記の前に附した『愛瀾閣自叙(統)』によると、憚代英は畏友余家菊と「自助の約」を結んでいた。と同時に、「私の理想は、人を助けることで人に交際を求める方法としたい」と考えていたという。しかし彼が快く他人を援助すると、相手が図に乗って憚代英の友人顔をして見栄をはったり、人の好きが利用されて相手の利益に奉仕させられたり、腹の立つ思いをすることも多かったらしい。従って自立を志し自助に励んでいた憚代英は、他人への援助については、迷い揺れ動く日々を送っていた。

私は苦学主義を実行して以来、生計を立てる困難がはつきりわかった。……私は特に熱心に弟を助けている。伯言や長青には、助けてやりたい気持はあるが、結局、自存のために果していいない。思うに自存のためには、努力して高い目標を目指さないわけにはいかない。伯言たちにもし志があれば、自力でやりとげるよう希望する。私は自分をほったらかして他人に力を貸すなど、したくない。だが私は彼等を助けなくても、心もまた落着けない。

この後めたい居心地の悪さが、「自分が損をして他人に得をさせる」ことは、最高にバカを見ることだが、「最高に楽しみを追求する」ことだとの、自虐的な居直りを招いてもいる。「人を助ける」ことについての、この屈折した心の動きに決着をつけることになったのは、一七年の夏令会参加であった。そこでキリスト教徒の伝道の熱意に深い感動を受けた憚代英は、「自ら助け人を助ける」を宗

旨とする学生団体の結成を呼びかけることになった。これは「自助」と並んで「人を助ける」ことが、人格の修養上に極めて大きな効果を發揮することの発見によるものであった。そのことを、彼は次の如くに述べている。

常に他人を助ける者は、その意志は日々自然に高くなり、ゆえに悪の誘惑は来るのが難しくなる。他人を助けない者は、その意志が日々自然に卑しくなり(私はずっと自助を偏重していたが、自私と嫉妬の悪徳がすぐに生じた。幸いに何とか持ちこたえて、人を損うことはしないですんだ)、悪の誘惑は自然に来易くなる。

つまり他人に援助の手を差し伸べることは、私心(エゴイズム)や「人を嫌悪する心」や嫉妬心、「卑劣な感情」、「消極的」で「ぐずぐずはつきりしない」心といった、否定的で不道德的感情の除去に効果があり、他面、「卑劣の感情が自然と減少し」、「高尚純潔」になり、進取・向上の精神に富み、助けられた人の信頼に応えようと励むがゆえに、「陶冶の効、期すべし」の成果があがると言う。

従って「助人は即ち自助」であり、「自助する所以」ということになる。そして団体を結び、「相互に見習い」つつ、解ることなく「自助助人」に努力する、すなわち「互助」によってこそ「罪悪を免れる」ことが容易になると考えていた。それゆえ互助社の名前はクロボトキンの『互助論』に由来するとの事であるが、その中味は、「自助助人を以て善を為す」ことを指していた。そして団体の結成は、「自助助人の事業」の永続の保証として必須不可欠であった。

そして一七年十月に互助社が結成されるや、「自助」の戒約八項目の厳守を誓い合い、身近かな人々への「助人」を開始した。「助

人」の具体的内容は、友人や近親者の勉強を手伝ってやったり（中学部の教員となって後は生徒に補習をしてやることも多かった）、読書法を指導したり、団体の結成や進め方の相談に乗って激励してやったり、YMCAの夜学で教えたり、また自分の日記を見せてやったり、日記をつけるよう勧めたり等々、多岐にわたっている。勿論試験の際に友人にカンニングさせてやったり「不正当な助人」は厳しく戒めている。惲代英の日記には十一月の初めから、「助人」が点検項目の一つとして独立し、「助人」が自覚的意識的に追求されている。

ところで、一七年に惲代英もスマイルズの『自助論』<sup>セルフ・ヘルプ</sup>を購入予定書の一冊としてあげているが、後に惲代英が上海で『中国青年』の編輯に当った頃、形影相伴うが如く相互に協力しつつ、青年学生の啓蒙・指導に当った人物に楊賢江がいる。そして楊賢江は『読自助論』を『学生雑誌』四卷十期（一七年十月）に発表している。夙に『学生雑誌』に投稿の経験をもつ惲代英は、その常連投稿者で、且つ一五年八月に『学生雑誌』二卷六期で懸賞論文の第一等賞の榮譽に輝いた楊賢江には注目していたと思われ、多分、その『読自助論』も読んだにちがいない。そしてついに南京高等師範遊学中の弟の代賢を通じて連絡がついた。一八年五月十七日、楊賢江からの第一信が届き、翌日、彼は仁社で良友を得たことを報告している。

さて先述した惲代英の「助人」の位置づけの大きさから見て、彼は楊賢江が「自助」を偏重して「助人」の意味を軽視しすぎていると感じたらしい。そしてその点について楊賢江に自己の見解を書き送ったものと見える。楊賢江の返事について、惲代英は、「大抵やはり自分の能力に自信がもてないので、思い切って人を援助しようとしなないのだ。だが人を助けるといふのは、なにも頭のとっぺんか

ら踵まで擦り減らす（墨翟のこと——後藤注）などということではなく、救える人間を救うということで、少ない力で大きな成果があげられる」と述べ、不満を表明している。<sup>(註)</sup>

そして五月二十九日、「助人」の五つの理由を説明した書簡を楊賢江に書き送っている。その五つの理由とは、まず第一に、能力が備ってその後に人を助けるといったら、誰も自信がもてないだろう。第二に、自助のみで人を助けなければ、その自助も完全なものとなりにくい。自助は責任心だけだが、人を助けるのは興味と責任心の二つの要素で注意を喚起する。第三は、人を助ければ、お返しに多くの人々から助けてもらえるので、自助の場合よりも更に自己の人格向上の効果が大きい。第四に、人を助けることにより、互助の能力を習得できて、社会に処して行く上に甚だ好都合である。第五に、自助して人を助けねば、不肖者は自己の欠点に気づくべきがまま自己に安住する。だから「自助即助人」というのは、必ずしも通用しない。

以上の五つの理由の中の二つめの理由については、五月二十二日の日記に詳しい説明がある。惲代英はそこで、常人はいつも私心が非常に多いので、とても人を助けるなどではできない相談だと言うが、実は私心と興味とを並べると、人は私心を放置して興味につくものである。人を助けることが一つ二つ成功すれば、その興味が鼓舞されて、利己心を犠牲にして興味のある事に趨くのだと述べている。要するに、自己および互助社の友人達の経験を通じて、人を援助することが自分に喜びを与えれば、人はただ義務心からだけでなく、その喜びのために人を援助するのだと言うのである。

この手紙が楊賢江に届いた六月三日、惲代英と同じく日記を提唱していた楊賢江は、その感想を日記に書き記している。<sup>(註)</sup>それは、自

分としては先ず吾が身を完備して人に感化を及ぼせば、その人は自然に変わると考えていた。しかし今から思うと、やはり自己中心的であつたかもしれない。「何時でも何処でも不善があるのを見たらすぐに勸導を行い、善いところがあるのを見たらすぐに努力して行う。こうすれば他人のことは見て見ぬふりをする思想が除去」される。他人の危難を助けに行く時、自分のことにかまける悪習が消失してしまうのがこれだと述べている。従つて一八年二月、『学生雑誌』五卷二号に『学生之兼善思想』を発表し、「独善思想」の打破のため、「美<sup>よきこと</sup>行<sup>いざなひ</sup>を励まし合い、過惡を戒め合う」ことを主張していた楊賢江に、自己の主張を再確認させ更に一步前進させるものであつたとしてよからう。

さて互助社を結んでの「自助」「助人」の結果、各成員の間に品性向上の著しい効果があがつた。<sup>(18)</sup> 憚代英はそれを喜び、「風氣を改造し」、「社会を改良する」望みも夢ではないと述べている。とはいへ、「助人」は学業の時間を奪ひ、自分のための事ができないとか、他人から笑われてバカを見るとかの不満や反対の声は容易に消し難かつた。<sup>(19)</sup> それに対し、無駄話やその他のつまらぬ事柄に費す時間に比べて多くの時間を割くわけではなく、しかも残りの時間を緊張した、活潑な態度で有効に使うがゆえに、かえつて能率があがる、などと説得している。だがそれではまだ不十分と考えたのか、「自己を犠牲にして道徳を履行する勇心」をもち、「良心」の命ずる事を行うよう述べている。他人から笑われるのを怕れず、困難に打ち勝ち、自らの力量を増強せよと説く。バカを見るのは、人間らしく生きようとすれば、早晚必ず遭遇することであり、それに対処する能力を早くに発達させていれば、将来社会に出たときの準備となると説いている。<sup>(20)</sup>

従つてこの段階になると、五四運動も経験して、中国社会の改革が生易しいものではないことを認識する中で、学生たちにもそれなりの覚悟を要求するようになったものと見る事ができる。当時の中国の学生は、社会全体から見れば甘やかされた。特権的な階層である。それゆえその弱点を克服して、中国の将来の運命を担う人材としての自覚の下に、自己を厳しく鍛え上げて欲しいとの熱く切なる期待が、その裏に流れていると見る事ができる。

## 第六節 善勢力の養成

さて学生達がサークルを結び、互いに切磋琢磨しつつ「自助」「助人」して人格の向上に励む憚代英の互助社の活動が、「周囲の一般の風氣」に影響を及ぼして改変を促し、この調子で行けば「社会の改良」も夢ではないと喜んだことは前節でふれた。だとすると、互助社は結局、社会の改良という大目標に向けての第一歩という戦略的位置づけに置かれるが、その中間にある媒介項は何を想定しているのか。そもそも社会の改良についていかなる構想を抱いているのか。それはいつ頃から思いついたのか。

憚代英の日記に見るかぎり、政治事件に関する記述はさほど多くはなく、いわゆる政治青年としての側面は、特に強烈だとは見られない。しかし当人の言によると、辛亥革命以前から投稿を開始して、「時事小言」に頗る優れていたとのことである以上、<sup>(21)</sup> 政治に鈍感であつたとは考えられない。むしろ「自分は久しく政治論説を書かなかつた」<sup>(22)</sup>とあり、また一九年九月の王光祈あての書簡に見える発言とも併せ考えると、やはり意図的な韜晦、抑制がはたらいっていたと見られる。この問題については、第三章で取り上げる。

さて憚代英の政治との関わりは、日記によれば、一八年五月の日

中共同防敵軍事協定反対運動、一九年の五四運動、への参加を除いては、一七年四月、『欧戦に対する大建議』を執筆し、總統、總理、外交総長、王正廷、蔡元培、馮国璋、湯化龍、京報、民治日報、時報などに送りつけた行動があげられる。時恰もアメリカは事実上の交戦状態を正式の対独宣戦に切り換え、二月革命でツァーリズムを倒したロシアは対独単独講和の意志を示し、ドイツ国内ではロシア革命の影響を受けて共和制要求の声が高まり、そして中国では対独国交断絶の後を受けて対独参戦の可否をめぐる論議が盛んに渦巻いていた時期であった。

こうした第一次大戦の帰趨を決する重大な時期に、憚代英は中国の外交の取るべき方向として、「大義を世界に唱え」、ドイツ人民を支援してホーエンツォレルン皇室を倒し、世界的潮流である民主政治の流れの促進を、世界各国に呼びかけるよう提言する。「大同主義を抱懐する」彼にとり、この方向こそ、戦争を早く終結させて、再び戦争が醸成される禍根を未然に摘みとり、世界平和を実現する道であった。だがこの提言に対しては、余日章の前任者としてYMCA全国協会総幹事をつとめ、一六年八月の国会再開で参議院副議長に返り咲いた王正廷が返事をくれたのみで、他からは何の反響もないまま終った。<sup>(18)</sup>

また具体的行動に出はしなかったものの、対独参戦問題を焦点に激化した国内の危機的対立状況に対して、「官僚は決して恃みにできず、軍人はとりわけ恃みにできない。中国は民党が国事を治める実力がなければ、うまく行かない」との見解を明らかにする。<sup>(19)</sup>ただ残念なのは、「民党」が実力養成のすべを知らず、軍人、官僚、更には外国人の力を借りて性急に決着をつけようとするがゆえに、成功しない。成功したとしても、「暴を以て暴に易ふる」だけで、国

内の混乱は止まない。彼にとり当面の急務は、「民党」が実力を養い、国民の信用を回復すること以外になかった。<sup>(20)</sup>そのために彼は、「民党が政權放棄の決意を固め、教育と実業の両面から社会の改良に着手して、風俗を転変して、国がまだ亡びないうちに捲土重来を図る」よう提案する。<sup>(21)</sup>

要するに、「風俗を正すことを救国の唯一の要件と考える。風俗が正しくなれば、一国の政治がうまく行く基礎ができたことになる」というのが、彼の社会改良の道筋であった。そして社会改良の根本的方策を、「風俗」の純化に求めるこうした主張は、当時の中国の前途を案ずる知識人のものとして、取り立てて珍らしいわけではない。むしろ、伝統的、常套的発想に由来する処方箋として、誰でも考えつく、極く一般的見解であったとしてよい。問題は、年齢や社会的地位等々により、その着手のしかたが異なることである。学生であった憚代英は、互助社を結成するという道を選んだ。そして「修養し且つ社会のために奉仕する団体」である互助社の活動を通じて、彼は何を目指したか。

我が国では善人は自分一人だけ行いすましている人が多い。だから善人は団結力が常に小さく、従ってその勢力も小さい。また善人は消極的で、積極的でない者が多い。だからその活動力も悪人に及ばない。これが我が国の社会がいつまでも改良の望みがない理由である。私は手だてを講じて一般の善人に連絡をつけ、その勇気を鼓舞してやらねばならない。またやれることを告げ、耳を傾ける値打ちがないと思わせるような高すぎることは告げないようには必要がある。こうすれば、次第に良好な勢力を養成して、悪勢力と争うことができるようになる。<sup>(22)</sup>別の言葉で言うと、「善勢力を培植して善人に積極的な精神と切

実な能力とをもたせ、互助の団体を連合して、悪勢力と奮闘しそれを克服する準備をさせなければならない」ということである。従って互助社の活動により育った人々が、次々に新しい互助社を作り広げて行き、全国的な範囲で善勢力が団結し積極的に活動するようになったとき、「風俗」は大きく改変し、社会の改良も実現が可能になる。それゆえ憚代英の厳しい毎日の修養、互助社の仲間の努力は、以上の如き遠大な見通しをもつプログラムの上に位置づけられているのである。

ところでこの「善勢力の養成」という考え方は、いつ頃、彼の中に兆したのか。それを明確に物語る資料は目下のところ見当たらない。だが一八年五月五日、七日の日記中に書きとめられた余日章と艾迪(Sherwood Eddy)の演説の内容が、我々の注目を引かざるをえない。余日章の発言は次の如くである。

悪勢力に勝てない者は、逃げるがよい。だが逃げるのは、避けるためではなく、友人を探して一緒に行って勝つために他ならない。……思うに、悪事を行う能力や機会がなくて悪事をしないのは、必ずしも悪人でないとはかぎらない。能力や機会があるとき、悪事をしないか見てごらん。その人の人格が決まるのだ。一人では悪勢力に勝てなくても、勝ちたいと思う人は、多くの同志や友人と団結して一緒に勝つ必要がある。

艾迪もまた、「今日の救国も一緒にあって、ひとかたまりに集まる必要がある。一人では中国を救うことはできない」と述べている。憚代英は五月九日に、この両人の演説に対する感想を記している。それは、「(一)確かに社会の改良は短期間で可能な事である。善良な少年を確保し、一緒に善を行うことのできる少年を助けてやれば、悪勢力に勝利するのは容易である。……(三)友人を求めて敵に勝ち、

並びに友人のために友人を求める、これはみなすでに進行している事である」との内容であった。そして憚代英は「善勢力の養成」を訴える二つの文章を執筆した。一つは、『実現生活』(『労働』一卷三号 一九一八年六月)であり、他の一つは、『一国善勢力之養成』(『青年進歩』十六冊 一九一八年八月)である。

さて以上から、憚代英の「善勢力の養成」の考え方が、YMCAの余日章や艾迪のそれと大いに共通する点をもち、一八年五月の両人の演説により、更に確信を与えられたこともわかる。とはいえ、余日章の思想的影響とか、YMCAの活動方針の影響などと直ちに結論するには、材料が決定的に不足している。従ってもう少し余日章について見ておきたい。さて武昌のキリスト教の牧師の家庭に生まれた余日章は、文華大学附属中学の教師をしていた時に、人格修養と軍事訓練を提唱し、雑誌を出版し革命を宣伝したため、清政府から逮捕されそうになったという。辛亥革命が起るや、武昌で直ちに赤十字会を組織して救護活動に当たっている。一九一三年、YMCA全国協会の講演部部長、一六年夏、王正廷の後任として全国協会総幹事になり、以後三四年まで十七年余り、その地位にとどまっている、当時のYMCAの活動と切り離せない関係にある重要人物である。夙に演説の名手として名を馳せ、総幹事になってからも、一年の半分は中国各地の都市を講演してまわったという。

彼の主張は「人格救国」論として知られている。彼は、「中国積弱の根本原因は国民道徳の退化にある。もし道徳の提唱、人心の改革から着手しなければ、一切の救国の主張はみな空談に等しい」とし、道徳こそ「需要中の需要」と見なしていた。と同時に、YMCAを中国の発展・強化を図る社会奉仕機関と位置づけていた。一八年五月五日の憚代英の日記の中に、余日章が、「私徳と公德とを無

理に分けるのは、私徳不良の人が、それによって人を欺くための言葉だ」と言ったことを記録している。この言葉は、「小さいところで過失を犯さないことができない人間は、大きなところで必ず過失を犯す。……小さいところで過失に勝てないでいて、大きなところで過失に勝つことを望むのは、自己欺瞞の甚しいものだ」との惲代英の発言と瓜二つである。

そして惲代英が余日章を尊敬し、その演説を以前から聴く機会をもっていたであろうことは、いくつかの資料から証明できる。一七年三月二十五日の日記には、凌儀器の演説について、余日章と並ぶものと賞讃している。また学長陳時から『光華学報』の編集を委嘱され、その二年二期の『名譚』欄に余日章の演説を入れる計画を立てている(日記一七年五月二十二日。但し中途で変更があったらしく、掲載されていない)。また一八年五月七日には、宗教や教育などについて、個人的に二時間ほど面談している。一八年の夏令会にも余日章が来るとの事前の通知によって、会えるを楽しみにしていたが、実現しなかったので不満をもらしている<sup>(16)</sup>。

さてまだ状況証拠の域を出ないが、惲代英の互助社の結成、及びその活動にYMCAの影響が決定的に作用したのと同じく、その「善勢力の養成」の主張にも、余日章、及びYMCAの影響を無視できないと見てよからう。勿論その場合、触媒、発酵のタネとしてはたらいいたことも含めてである。

従って一七年十月に武昌で発足した互助社は、人格の修養の追求、及び「善勢力の養成」の目標において、YMCAの深い影響下にあったと結論することができる。ただ相違点は、宗教的性格は拒否していること、及び当初は専ら修養に比重が置かれ、社会奉仕の側面が欠けていたことである。しかし社会奉仕の欠如は、一八年五月に

は補充されるようになり、互助社は更にYMCAに接近したと評することができる。「互助社が発達できれば、青年会よりも更に多くの事業をし、効果は更に遠く及ぶはずだ<sup>(17)</sup>」や、「どうして互助社が将来のYMCAとならないことを知ろうか<sup>(18)</sup>」などの発言は、YMCAへの接近、及び更にそれを凌駕することへの期待を雄弁に物語っている。

そしてこのことは裏から言うと、YMCAをモデルにして誕生した互助社は、YMCAの枠を乗り越えるのが、極めて困難であったことを示している。その人格修養の不断の努力は、包恵僧から、「清教徒のようで人を容易に寄せつけなかった」と評される、自己に厳しい求道者の雰囲気漂わせていた<sup>(19)</sup>。また「善勢力の養成」の主張は、惲代英の社会改良プログラムの重要な中間目標として、以後もずっと彼の思想の中に生き続ける。彼の教育救国論の立場に立った教育改革の実践、『中国青年』主筆としての学生への働きかけ、及び孫文理論の再評価と国民革命の提唱など、それとの関わりの中で考察せねばならない問題は多い。

## 第七節 おわりに

さて以上に見て来たように、惲代英の場合、その五四時期の思想と行動に、キリスト教(とりわけYMCA)の影響が大きいことは否定すべくもない事実である。問題はキリスト教の教理については全く受けつけず、キリスト教のキリスト教たる所以は全く入らなかったことである。むしろキリスト教者の道徳的高さ、社会奉仕活動の部分に共鳴し見習うべきモデルを見出したのであり、キリスト教の文化的受容の一種に属するとしてよからう<sup>(20)</sup>。

惲代英は、キリスト教の神を否定的に媒介することにより、人間



の内にある道德的命令者良心を発見し、自由で主体的な自己立法としての近代的な人格概念に接近できた。そして、「西人の社会のすでに進歩したところでも、その事をなす人はやはり彼此互いに見習い研究する援助があるのに、中国ではこれがない」と、中国と西洋近代との相違を述べた。従って彼は、中国社会の近代化のため、中国の救亡のため、キリスト教から近代市民社会を担うべき新しいモラル、及びそのモラルを養成する方法としての「自助」「助人」の新しい組織づくりを学び取ったのである。また社会の改良、近代社会実現の方法として、互いに助け合って近代的人間としての人格の修養に励み、社会に奉仕するサークルが全国いたるところに生まれ、そしてそれらが連絡を取り合って結集していく方法、即ち「善勢力の養成」を学び取ったのである。

それゆえ一九二二年の反宗教運動、及び二四年から二六年の反キリスト教運動における憚代英の批判についても、他の人々との差異のありかを見極めつつ考察を進める必要がある。憚代英の場合、YMCAとの密接な関わり、及びそこから学び取ったものの大きさを考えると、その批判もキリスト教徒たちへの自己反省を促す、説得力と建設的示唆とに富むものであるにちがいない。また他面、その内情を知悉していたがゆえに、最も痛いところを衝くという鋭さをもち、大いに脅威であったにもかかわらず。

また『中国青年』の主筆として、青年の「良師益友」として青年学生の絶大な信頼をかち得ていた憚代英は、青年学生に友人達とサークルを作り、人格の修養と社会奉仕を行い、中国社会の変革、救国の責務を担う人材としての準備を怠ることのないよう呼びかけている。彼の互助社の活動は、若く未熟で社会的経験の浅い学生達に、一人前の社会人として自己を育て上げることにおいて、いつの時代、

どの社会でも通用するある種の普遍性をもっていた。それゆえ自らの経験を活かす働き場として、『中国青年』の主筆は彼に打ってつけの場であった。中国の「志ある青年」の「驕傲」「孤僻」「円滑」「浮燥」の欠点を知り抜いていた彼にとり、学生を鍛え上げるために助言を与え温かく励ましてやることほど、やり甲斐のある仕事はなかったであろう。

さて五四時期の憚代英の思想と行動における、キリスト教、とりわけYMCAの落した影は決して無視できるような、偶然的、外在的なものではなく、彼の以後の思想と行動を決するほどの大きさをもつことを確認できた。そして五四新文化運動の特質形成の上において、キリスト教、特にYMCAの果たした役割と意味の意外な大きさにについても、ある程度の見通しを得ることができた。それゆえひとまずこれで本章を終りとしたい。

## 注

- (1) 拙稿『憚代英の出発』（信州大学人文科学論集十六集 一九八二年）、『互助社の第一年』（『五四時期的社團』（一）所収）参照。尚、中国ではカトリックを天主教と呼び、プロテスタントを基督教と称する。本稿でも主としてプロテスタントにキリスト教の名称を使う。
- (2) このクラブがベンジャミン・フランクリンの自叙伝に大きなヒントを与えられて生まれた可能性については、昨年の拙稿『憚代英の五四時期的思想——日記を中心に——』（一）で指摘した。フランクリンについては、『趙元任早年自伝』（伝記文学社 一九八四年）で趙元任が一九〇七年から一〇年の南京江南高等学堂時代に、「私が最も愛読した書は福蘭克林の自伝で、読み終って後、『一個完人』となる決心をした」と述べている。また陳鶴琴は『我的半生』（一九四〇年）の中で、一九一一年から一四年の清華大学時代に最も深

（完）

い感銘を受けた書三冊の一つとして『佛蘭克林自伝』をあげている。清華大学で学校青年会を初めて設立し、「校役補習夜学」、「義務小学」をつくり、社会奉仕活動に着手した陳鶴琴は、また学友と「仁友」という「同志会」を結んでいる。それは「切磋学問、砥礪品行、聯絡感情、互相協助」の宗旨の下に、学問を討論し、過失を戒めあい、油印の小新聞を発行していたという。主要メンバー七人で九年間継続したものである。陳は、「フランクリンも当年類似の組織をもち、学問を切磋し、社会を改良した」と述べている。

- (3) 中国のYMCAについては、王治心『中国基督教史綱』（一九四〇年）、顧長声『伝教士と近代中国』（上海人民出版社 一九八一年）、陳秀萍『沈浮録』（同濟大学出版社 一九八九年）、江文漢『基督教青年会在中国』（文史資料選輯第十九輯）、Shirley Garrett『Social Reformers in Urban China』（Harvard Univ. Press, 1970）など参照。青年会には城市青年会と学校青年会の二つがあった。

- (4) 日記一九一七年八月二十七日、同九月十一日、九月十六日、九月十八日など。

- (5) 日記十月八日。『互助社第一年』。

- (6) 『互助社第一年』。

- (7) Frank Wilson Price。杭州生まれのアメリカ南長老会の牧師。金陵大学で教鞭を執り、孫文の『三民主義』を英訳したという。『趙元任早年自伝』によると、一九一九年、コーネル大学で物理学を教えていた趙元任をブライスが訪問し、趙の「家郷江蘇常州話」で「暢談」したとある。

- (8) まず最も普遍的なケースは講演を聴きに行くことであり、楊賢江は『我之学校生活』（学生雑誌二巻八号 一九一五年八月）の中で、「該会每逢星期日下午開演説会」と述べている。『張学良の昭和史最後の証言』（角川書店 一九九一年）によると、青年時代に奉天のYMCAに入入りしていた張学良は、余日章の講演の度毎に必ず聴きに行き、三つの有益な忠告を受けたことを報告している。また張

伯苓の『中国は亡びない、私がついている！』の講演に大変感動したという。その他、ジョン・モットやシャーウッド・エディの中国各都市の巡回布道講演に多勢の聴衆が集ったことは、顧長声前掲書やクリスティー『奉天三十年』（矢内原忠雄訳 岩波書店）や当時の新聞などでよく知られている。また幻灯や演劇の上演、テニス・ビンボンなど娯楽・体育設備の自由な利用や、新刊書籍、新聞・雑誌の自由な閲覧については多くの人々が語っている。更にYMCAの寄宿舎については、例えば李大釗が日本留学中に住んだ如く、また惲代英が一八年七月の夏令会の後に上海で宿泊した如く、これも会員・非会員を問わず低廉な経費で利用が可能であった。そして瞿秋白、鄭振鐸や許地山などの編輯した『新社会』は、北京のYMCAの附属組織で社会福祉・社会奉仕を特に目的とした北京社会実進会の出版物である。また青年学生団体の会合の場所として借用することも、惲代英の一八年五月二十三日の日記などからみて、可能であったようである。バイブル・クラスの出席と英語の勉強との関連は注(14)で述べる。

- (9) 石原謙『中国プロテスタント宣教史』（東京女子大学論集四一一 一九五三年）、山本澄子『中国キリスト教史研究』（東洋文庫近代中国研究委員会発行 一九七二年）参照。

- (10) 本稿の後日物語としていづれ二二年、及び二四年から二六年初めの反キリスト運動も論究の対象とするつもりである。とりあえず、山本澄子前掲書、及び聯経出版事業公司『中国現代史論集』第六輯『五四運動』所収の三篇の論文、Kache Yip『Religion, Nationalism and Chinese Students』（一九八〇年。その一部は、林治平編『近代中国基督教文集』宇宙光出版社刊に訳載されている）、尾崎文昭『陳独秀と別れるに至った周作人』（日本中国学会報三十五集 一九八三年）をあげておく。

- (11) 注(1)の拙稿参照。惲代英は、世界を創造したのは、上帝であるか自然の物理的作用であるかは、今日まだ断定を下せないので、

敢えて性急に上帝の存在を否定も肯定もせず、科学が進歩して決着をつけてくれるまで待つと言う。彼はこうした態度を、「懐疑的態度」と名づけている（日記一九一一年十一月四日）。彼によると、どれが真理かまだわからない時は、慎重に辛抱強く解明されるまで、にわかには結論を下さない方法を、アメリカの哲学者 Fullerton から学んだという。従って、「扶拙の事」（日記一八八三年三月三十一日）や、亡妻の姉が夢に見た二字（一九一一年四月十八日）などについても、「興味深い」とか、「冥冥の事は言い難い」などとして、単純な科学主義の如く、直ちに斥けたりはしていない。

(12) 日記一九一七年二月二十四日。

(13) 注(3)前掲書参照。非キリスト教徒のYMCAのメンバーは「会友」と呼ばれたという。因みに教会学校では宗教に興味を示さない学生は、「数が多く、半友誼、半宗教の性質をもったキリスト教団契に勧誘される」という（劉王立明『滬江大学始末簡記』文史資料選輯三十一輯）。なお、YMCAの姉妹組織YWCAについては、末次玲子『中国における父権家族改革とキリスト教』（中国女性史研究 第五号）を参照せよ。

(14) 楊賢江前掲文、クリスティー前掲書参照。潘光旦は『清華初期の学生生活』（文史資料選輯三十一輯）の中で、バイブル・クラス出席の学生は結構多く、英語練習の機会を増やすためと弁解するものがあると同時に、英語をエサに学生を釣るクラス・リーダーもいたことを紹介している。巴金は一八年、祖父の許可を得てYMCAの英語補習学校に入っており（嶋田恭子『巴金年譜』野草二八 一九一一年）、老舎もYMCAの英語補習クラスに出席している（曾広燦『老舎早期訳文』文史哲 一九八一年四期）。李大釗も東京でYMCAで英語を学習しており、王光祈も一九一五年北京で英語を習いに行っている。こうした例は枚挙にいとまがない。

(15) 舒新城（字通菴）は『我和教育』の中で、長沙青年会総幹事のアメリカ人饒伯師がよく話に来てくれ、また病気の時にお金がなく薬

が買えない彼に薬をくれたりした親切にほだされ、「キリスト教徒、及びキリスト教に無意識の裡に微妙な好意を生じた」と述べている。(16) 舒新城は民国四、五年の二回、華中キリスト教聯合会が廬山で催した夏令会に参加したとあるが、これは記憶がいでであろう。もともと舒新城も英語の勉強のためYMCAに近づいたという。一七年夏以後、憚代英と書簡の往復をするようになった。舒が武昌の利群書社の活動などを長沙の毛沢東らに伝える媒介をなしたと思われる。(17) Harry Emerson Fosdick（米）の著書である。王道命『五十年來』（一九五五年）によると、この現代派の健將の著書のうち、青年協會書局で翻訳出版されているのは、『完人的模範』、『信仰的意義』、『祈禱的意義』、『服務的意義』、『明經指南』などがあるという。従って一八年四月に憚代英が読んでいた『完人之範』はフォスディックの著書と見てよい。なお内村鑑三の一九一九年三月十九日の日記（内村鑑三全集三十三巻所収）には、近頃読んだ書物の中で最も有益なものの一つとして、フォスディックの『不朽生命確證論』をあげている。

(18) 日記一七年八月二十九日。

(19) 日記一七年八月二十五日。

(20) 日記一七年八月二十七日。

(21) 日記一七年九月三日、四日、十月一日。憚代英はこの年に『新青年』に二篇の文章が掲載されており、陳独秀から注目されていたことは、三月十四日の日記からも窺える。この間、『新青年』が五ヶ月間休刊していたためもあり、結局は掲載されなかったとはいえ、原稿が集まらなかった時のピンチヒッターとして使うためにリザーヴしておいたり、また奨励の意味もあったりして、原稿料が支払われたようである。

(22) 日記一七年十一月四日。謝洪賓（廬隱）は、中国YMCAの創立者の一人であり、YMCAの書報部の幹事として多くの叢書を編み出版し、青年の人格の向上、道德修養のために尽力した。舒新城前

掲書は、曾文正公全集と李廷翰『貧民教育談』と並んで謝廬隱『致  
今世少年書』を重大な影響を与えられた書としている。王道命前掲  
書は謝の『修学一助』をあげている。

- (23) 日記一七年十月十二日、十一月二十二日、十二月十日、十二月十  
三日など。
- (24) 日記一七年十一月十一日。
- (25) 日記一七年九月十日。
- (26) 日記一七年十二月十五日。
- (27) 日記一七年十二月二十八日。
- (28) 日記一八年四月三日。
- (29) 日記一八年四月二十一日。
- (30) 日記一八年四月二十七日。
- (31) 日記一八年四月二十六日。
- (32) 日記一八年六月二十一日。
- (33) 日記一八年五月二日。
- (34) 日記一八年五月二十八日。
- (35) 日記一八年六月四日。
- (36) 日記一八年五月七日。
- (37) 日記一八年五月九日。
- (38) 日記一八年五月十五日。
- (39) 日記一八年五月二十日。
- (40) 日記一八年六月十四日。五月二十一日頃より着手して、ほぼ二十  
数日を要したことになる。
- (41) 日記一八年五月十九日、五月二十五日、五月二十八日など。
- (42) 日記一八年六月十日。『青年進歩』十七冊（一九一八年十一月）  
に掲載。
- (43) 日記一八年五月十八日。日記一七年十月八日には「互励文」の最  
初のもの、一八年五月に改訂したものとの二つが並べられている。
- (44) 日記一八年五月三十一日。

- (45) 日記一八年五月十五日。
- (46) 注(45)に同じ。
- (47) 日記一八年六月二日、五日、六日、八日など。
- (48) 日記一七年九月二十四日、一八年五月三十一日。
- (49) 日記一八年七月三日。
- (50) 日記一八年六月二十九日。
- (51) 日記一八年七月十日、七月十一日。
- (52) 日記一八年七月八日、七月十一日。
- (53) 日記一八年七月九日。聶其傑（字雲台）は恒豊紡織新局を設立し、  
一八年六月には大中華紗廠を設立した綿紡績業家であり、上海總商  
会会長に就任したこともある。母は曾國藩の末娘曾紀芬で、『崇德  
老人自訂年譜』民国四年の条によると、夙にYMCAの会員であつ  
た聶雲台はその年、母および妻とともに上海崑山路の監理会で洗礼  
を受けている。曾紀芬は内姪季融からキリスト教の真理を説き明か  
され信仰の道に入ったと言う。曾國藩の三男曾紀鴻の孫娘曾宝孫の  
回憶録（『曾宝孫回憶録』）によると、彼女と彼女の七叔とはともに  
一九一一年に受洗している。従つて曾國藩の子孫にはキリスト教信  
者が輩出することになった。因みにクリスチャン・ジェネラル馮玉  
祥は、曾國藩を尊敬してやまず、その日記中に常に曾國藩の言葉を  
引用して自己を鞭撻している（『馮玉祥日記』江蘇古籍出版社 一  
九九二年）。また一八年四月にエディの演説を青年会に聴きに行き、  
深い感銘を受けた白堅武も曾國藩のコトバで自らを戒めている。舒  
新城も曾國藩の日記によって、少年時代、修養に励んでいる。李石  
岑、周仏海も同様である。
- (54) 日記一八年七月十日。
- (55) 日記一八年七月八日。
- (56) 日記一八年七月九日。
- (57) 日記一八年七月九日、七月十一日。
- (58) 潘光旦前掲文によると、青年会の経常活動は「主日礼拝」  
（じゅうりつらいはい）

「査経班」及び毎年夏休み西山で舉行される「夏令会」等の活動を通じて、「キリスト教の教義を伝播し、原有の信徒を固め、新信徒を吸収すること」であったという。

(59) 日記一八年七月八日、七月十一日。

(60) 日記一八年七月八日、七月九日、一七年十二月十五日。

(61) 日記一八年七月七日、一八年五月九日、一八年五月二日。

(62) 教会の独立と伝道方法の改良とは、日本でも中国でも非常に大きな課題と意識されている。日本では植村正久著作集、内村鑑三全集を繙読されたい。中国の本色教会運動、三自(自治・自養・自伝)運動については、山本澄子『中国のキリスト教会自立運動について』(近代中国研究第一輯 一九五八年) 参照。

(63) 日記一八年七月十日。

(64) 胡適留学日記によると、一九一一年六月十三日から六月二十二日までポコノ山の夏令会に参加し、そこでモット、ギルバート・レイド、フォスディックなどの講演を聴いている。そして六月十八日、中国公学の時の嘗ての同学陳紹唐の受洗以後の著しい人格の向上、宗教の「氣質の変化」能力の大きさ、及び Meach の自己の経歴についての演説に接し、「余ために涙を墮す、聴衆もまた涙を墮す。会の終るや七人起立して自ら願いて耶穌の信徒たらんあり、その一人は即ち我なり」の結果になっている。これは冷静になって考えると、胡適にとってジョッキンガな出来事であったと見え、六月二十一日付の許怡孫への手紙の中で自己の心理の動きを詳細に解剖している。そしてこうした「感情的」手段に訴えて信者を獲得する芝居じみたやり口を深く恨み、一種の反動を起したと、後年(一九九)に附記している。潘光旦前掲文によると、北米YMCAより派遣された「布道家」を招いて二、三日間の連続講演による「決志大会」「奮興大会」を開き、聴衆に「決志書」を配って信者を獲得する手段を、毎年、或いは隔年に用いたという。しかしこうしたマインド・コントロールの手段によって入信した人々の絶大部分は、アメリカ

カ留学の夢がかなうと、キリスト教の教理とアメリカ社会とのあまりに背反する現実を見て、その信仰が長続きしなかったと述べている。

(65) 日記一九九年一月二十五日、一月二十六日。

(66) 日記一九九年一月十三日。

(67) 日記一九九年三月九日。

(68) 日記一九九年三月二十三日。

(69) 日記一九九年三月十二日。また救世軍(日記一七年十一月二十一日)やボーイ・スカウト(童子軍)などの組織のあり方もモデルとなっている。なお武昌の教会学校文華大学はボーイ・スカウト活動と図書館学科の設置とで、全国に名を馳せていたという。日記一九九年六月十六日。

(70) 日記一九九年十一月二日。

(71) 張浩『五四時期的憚代英』、廖煥星『武昌利群書社始末』(いずれも『回憶憚代英』所収)

(72) 例えば日記一九九年六月二十二日によると、YMCAで『小説月報』と『威爾遜遊美雜記』とを読み、「ウィルソン氏は本当に平民主義を實行できる」と感嘆している。

(73) 日記一九九年八月二日、八月四日。

(74) 日記一九九年七月三日。

(75) 日記一九九年五月二十二日、一九九年一月十八日、一七年九月三十日、一九九年五月十四日。

(76) 日記一九九年十二月二十七日。

(77) 日記一九九年五月十四日。

(78) 日記一九九年五月十四日。

(79) 日記一九九年八月二十九日。

(80) 日記一九九年一月二十二日。

(81) 日記一九九年一月十八日。

(82) 日記一九九年十月十七日。

- (83) 日記一七年九月一日。徐彬如『憶代英同志』(『回憶惲代英』所収)によると、一九二六年一月、惲代英が広州で牧師の宣教師の石を投げつけられても微動だにせず語り続ける「精神」を見習って共產主義のため献身的に奮闘するよう提起したとある。
- (84) 『互助社の第一年』。日記一七年十一月二日。
- (85) 日記一七年十月八日。
- (86) 日記一八年五月一日。
- (87) 日記一九年一月二十五日の『寒假自省表』。
- (88) 日記一九年十二月十三日。
- (89) 余家菊については、日記一七年三月十三日には「頗る洋服す」として長所を数え上げ、日記一八年四月二六日には「誠に益友なり」とする。日記一九年二月二十四日には、西洋史の科目担当をやはり余家菊に譲らざるを得ない無念さを吐露している。
- (90) 日記一九年二月二十三日。
- (91) 『余家菊回憶録』。陳啓天『寄園回憶録』(台灣商務印書館 一九六五年)。秦賢次『記「少年中国学会」時代余家菊』(伝記文学第二十九巻第一期)。劉鳳章は耘心と号し、周易註などの著書があるという。
- (92) 日記一九年一月二十五日。
- (93) 王陽明『伝習録』第三条。
- (94) 日記一七年十二月九日。
- (95) 『致舒遜菴書』(一八年五月二日)。なお「勸解」とあるのは「勸戒」の誤りと思われる。
- (96) 日記一九年一月十一日。
- (97) 日記一九年一月二十二日、二月六日、二月十九日、三月十七日、三月二十日、四月六日、四月十一日、四月十三日、五月二十一日、七月八日、十月一九日、十二月三日、十二月十四日、十二月十五日など。
- (98) 注(1)の拙稿参照。
- (99) 日記一九年十一月四日。
- (100) 日記一七年四月三日。近現代中国人は「良心」「良知」をよく用いるが、「良心をもつ」、「良知を欺く」などの用例が一般的なところから見て、殆どが孟子の「本然の善心」の意味と見てよい。梁啓超『傷心之言』の『良心麻木之国民』(一九一五年)など参照。
- (101) 日記一七年七月二十六日。
- (102) 日記一九年十一月十三日。
- (103) 日記一九年二月六日。
- (104) 日記一九年四月六日。
- (105) 日記一九年七月八日。
- (106) 日記一九年八月二十二日。
- (107) 注(95)に同じ。
- (108) 日記一八年五月二日、五月三十日、六月十日、六月十七日、六月二十三日、七月九日、七月十一日、注(95)の舒新城への手紙など。
- (109) 日記一八年七月八日。
- (110) 日記一八年七月十一日。
- (111) 日記一九年五月十日、五月十六日、五月十九日、七月八日。
- (112) 日記一九年七月四日。
- (113) 日記一七年五月十七日。
- (114) 日記一七年七月十七日。
- (115) 日記一七年九月十五日。
- (116) 注(95)の舒新城への手紙、日記一八年五月四日、一九年八月二十三日、九月三日など。
- (117) 日記一八年三月二十九日、一九年一月二十七日、注(95)など。
- (118) 日記一九年一月二十七日、一八年四月二十五日、一九年二月二日。
- (119) 日記一八年四月二十三日、六月十二日。
- (120) 『互助社の第一年』
- (121) 日記一九年十一月二十九日。
- (122) 日記一八年六月十二日、一九年二月二日。



- (123) 日記一八年六月二十五日。「助人」は「正當の事」に関してであり、且つ「自ら助けないものを助けることはできない」との原則ははっきりしている(日記一七年十二月十二日、一八年六月二十二日、七月三日)。
- (124) 一七年の『可買書録』参照。
- (125) 『学生雑誌』二巻二号、三巻八号に掲載。
- (126) 日記一八年五月一七日。
- (127) 楊賢江は『学生自動之必要及其事業』(『学生雑誌』二巻五号 一九一五年)の中で、日記をつけることを勧めている。その理由は、憚代英日記の一九年一月一日の理由とは異なる。楊は更に家計簿をつけることを勧めている。またこの文中で、学生が自分達で団体を組織し、互いに指導し糾正しあい、私行を磨くだけでなく、公德を身につけるよう勧めている。楊賢江については、『中共党史人物伝』十八巻、及び『楊賢江教育文集』(教育科学出版社 一九八二年)の生平年表、著作一覧表参照。『楊英甫日記』はまだ出版されていない。一八年六月三日の日記は『楊賢江教育文集』の口絵の写真による。
- (128) 日記一九年二月二日。
- (129) 日記一九年八月二十三日、九月三日など。
- (130) 日記一九年十月十七日。
- (131) 『愛瀾閣自叙(続)』
- (132) 日記一九年四月十一日。
- (133) 日記一九年九月九日。
- (134) 日記一九年四月十一日、四月十七日。
- (135) 日記一九年四月三十日。
- (136) 日記一九年六月七日。
- (137) 日記一九年五月二十一日。
- (138) 注(136)に同じ。
- (139) 日記一九年十二月二十二日。
- (140) 明清以降「風俗」が問題になるときに常に念頭に置かれるのは、顧炎武『日知録』巻十三である。李大釗『風俗』(一九一四年)。また中村春作『風俗』論への視角(思想一九八八年三月)参照。
- (141) 日記一九年十一月十七日。
- (142) (95)に同じ。
- (143) 賈逸君『中華民国名人伝』(上)、謝扶雅『略述余日章之生涯』、『民国人物小伝』第三冊、『民国人物伝』第一巻、Biographical Dictionary of Republican China IV、黄炎培『余日章君紀念碑』、『湖北省志人物志稿』第二巻、『辛亥武昌首義人物伝』上冊。
- (144) 江文漢『基督教青年会在中国』(文史資料選輯十九輯)。
- (145) 日記一八年五月三日。
- (146) 日記一八年七月九日。
- (147) 日記一七年十一月十一日。
- (148) 日記一八年五月二十八日。
- (149) 包惠僧『二七回憶錄』。憚代英が生涯を通じて私徳、人格の修養につとめ、一点非の打ちどころのない高潔な人柄であったことは、茅盾『記Y君』及其他(『回憶憚代英』所収)、楊新華『憚代英底生涯』(『現代史料』四冊)など参照せよ。
- (150) 野沢豊『中国における統一戦線の形成過程——第一次国共合作と国民会議』(思想四七七 一九六四年)参照。
- (151) 隅谷三喜男『日本キリスト教史の再検討——新たな展開のために』(『日本プロテスタント史論』新教出版社 一九八三年)は、固有の意味のキリスト教史・教会史と、キリスト教的な思想史・社会史とを峻別する。山本澄子前掲書は前者の立場からの労作である。
- (152) 日記一九年十一月二十三日。
- (153) 『怎樣纔是好人』、『对于有志者的三個要求』(『中国青年』一巻一期)、『救自己』(同上 一巻四期)など応接に暇がないくらいである。
- (154) 日記一九年九月九日の王光祈あて手紙。